

# 婦人止學毛



第二卷  
第五號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、諸者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歓迎す。殊に家庭の誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰體は楷書振假名附のこと。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざること。
- 一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行 毎月一回五日發行○第一卷第一號明治卅四年一月二十日發行

定價 一冊金拾錢○六冊前金五拾七錢○拾貳冊前金壹圓拾錢○郵稅各一冊一錢○切手代用は壹割増但壹錢切手に限る。

入會者 入會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園内フレイベル會にて申し込まれるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

購讀者 本誌は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこま○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこま○見本は切手二錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節一赤にて御姓名の上にて附し候に付き早遣御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○總居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯者 編輯に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレイベル會あてのこと

廣告料 一頁十圓半頁五圓

明治三十五年五月二日印刷  
同 年五月五日發行

不許複製	發行所	東京市本郷區元町二丁目六十六番地
印刷者	編輯者	東京市本郷區元町二丁目六十六番地
印刷所	發行所	東京市本郷區錦町一丁目十九番地
發行所	印刷者	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	印刷所	東京市神田區錦町三丁目二十五番地
發行所	印刷所	東京市日本橋區本石町三丁目十三番地
發行所	印刷所	東京市日本橋區本石町三丁目十三番地

大賣捌所 東京東京堂◎同東海信文會賣會社◎同北陸館

婦人と子ども 第二卷第五號目次

子ども

樂隊の大勝利(やまとの翁)源ちやんの英語(記者)  
母の誕生日(矢橋小葩)お笑ひ草、摺み方、考へも  
の、忠義な犬の話(やまとの翁)前號考へもの、  
解、懸賞考へもの、第二卷第三號受賞者披露

家庭

幼兒に言ふ小言……………松村久子  
家庭に子供の必要なること……………小島松之助  
傳染病……………醫學士長瀬復三郎  
昔いろは料理……………石井泰次郎  
三つ身綿入羽織……………岡本ちか子  
小さき日記……………印東音鳴  
學術  
鐵道の話……………菊東基吉  
夢のはなし……………東基吉  
史傳  
津崎矩子……………下村三四吉

文苑

落花……………鷺  
春……………東  
春の夜……………つね  
和歌……………佐々木信綱外

説林

動物愛憐と教育……………本田増次郎

寄書

保育上の疑點に付て教を乞ふ東京横田  
備後の毬歌……………備後佐藤龜一  
我が地方の毬歌……………相模平岩繁治

雜錄

端午の話……………せ  
結婚論……………野本生譯  
寡婦と愛子……………一  
衛生上の注意……………黒水生

彙報

雲の上●學事集會●筆の雫●地方通信●新刊紹介  
●會報



# 婦人と子ども

## 第貳巻第五號

(明治三十五年五月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

### 樂隊の大勝利

やまとの翁

さて或田舎の農夫が、一匹の驢馬を飼って居り  
 ました。始の間わ、この驢馬中々よく働きましたか、  
 だんく年がよってきてからにわ、さっぱり力がな  
 くなって、も一何の役にもたぬよ一になりました。

夫それで主人しゆじんも まづ仕方かたがありませんから、近々きんきんに之これを屠ころして皮かわにしよーと考かんえて居ゐりました。處ところが驢馬うまの方はうでも、だんく風向かぜむきが面白おもしろくなくなつたから、何時いつまでも茲こゝに居ゐては どんな目めに遭あうかも知しれないと考かんえ付ついたもんですから、或ある日のこと そつと家うちをぬけ出して 東京とうきやうの方はうえと走はしり出した。  
 『東京とうきやうえ行いつて…そーさ、僕ぼくわ樂隊がくたいになろーかな』  
 こんなことを考かんえながら、或ある所ところえ着つくと、道側みちばたに大おほな獵犬かりぬいが さも勞つかれた様ように 力ちからのない聲こゑでうなつて居ゐる。

驢「オイ君、一体どーしたの？ そんな大な身体して」  
 犬「オヤ驢馬君ですか、僕ももー御覽の通り、こー  
 年をとってわ駄目です、獵にわ行けないし、主人に  
 わ打たれる。それでこゝまで逃げ出してわ來たです  
 が、さて、これから先わ、どーして食って行ってい  
 ーのかと夫が案じられましてね」  
 驢「ハ、ーそーゆー譯ですか、時に僕わ今から東京  
 え行つて樂隊になる積りなんですが、一人でわ面白  
 くなし、君が行つてくれると丁度いーなし、僕が笛  
 を吹く、君が太鼓を打つ、いーじやないか、ねー犬

君』

犬も此説に賛成してやがて二人連で出かけた。

暫く行くと今度わ一匹の猫に出遭った、今にも

泣き出し相な顔をして道の真中に座って居ます。そ

こで驢馬が又言葉をかけて、

「オヤ猫さん、どししたの？何か御心配なことでも

あつて？」

猫何だつて私の様になつてわ面白事も何もあ

りよーかありますまいよ、こんな年に年を取つてから

わ、齒もさっぱり利きませんから、もー鼠取り所の

騒ぢやない毎日く火の側に座って居ますからね、  
 とくお女将さんに追い出されてね、これか  
 らどししたらいかと思つて心配していますのさ」  
 驢「オヤくそれわお氣の毒さま、夫じや私等と  
 一所に東京え行つて、樂隊になりなさいな」  
 猫も今の處てわ、別に仕方がないのですから、す  
 く賛成して、夫から三人で一所に歩き出しましたが、  
 今度わ或畑の處え來ると、その小屋の屋根の上で  
 一羽の雄鶏が力一杯に鳴いて居る。そこで又驢馬先  
 生が、そこえ出て、



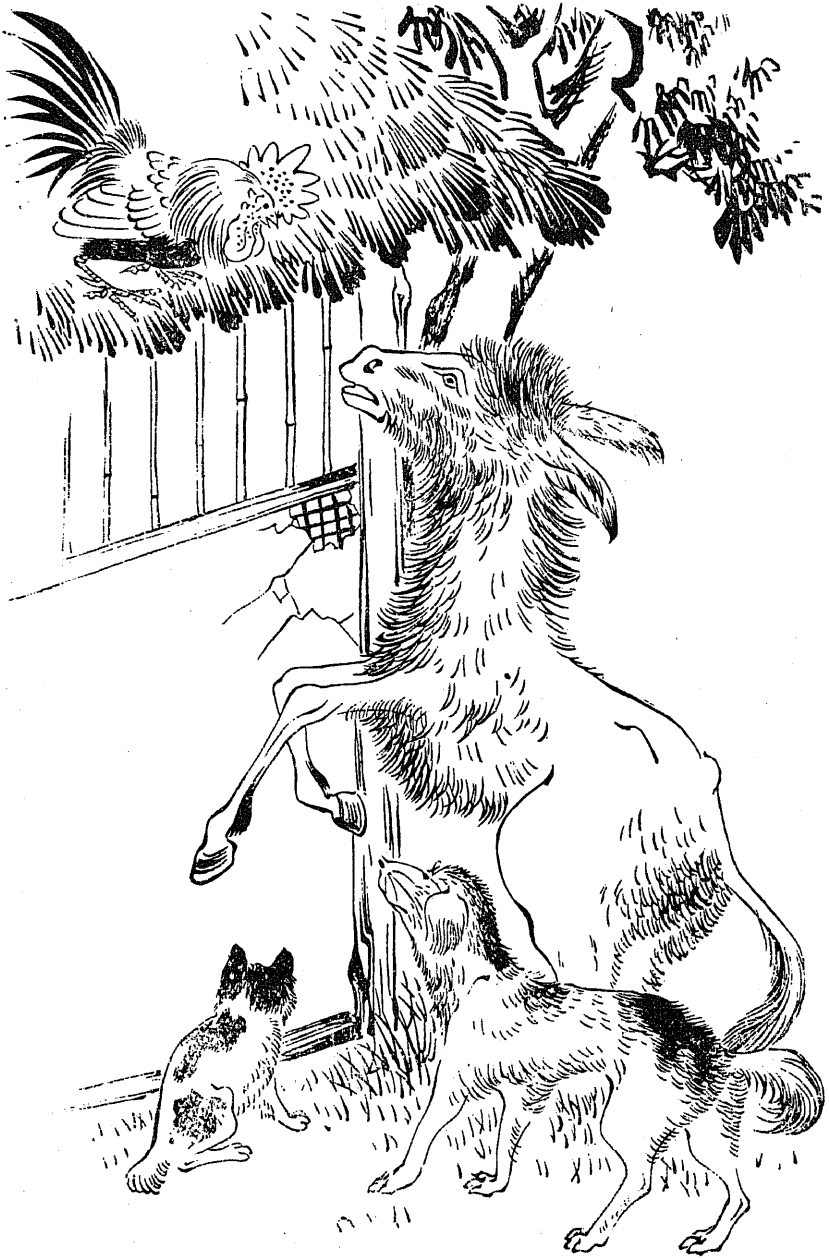
「驢やー今日わ、時に君わ一生懸命に鳴いてる様で  
すが、一体どーした譯です？」

「鶏」一体わ、僕わこーして夜明を知らせるのですが  
ね、明日わ、私の家にお祝い事がある相でお女將  
さんの話しによると、先づ第一に僕をしめ殺してお  
吸物にするのだ相な、もー僕の生命も今夜きりだか  
ら、それで出来る丈け長く喉一杯にないたのさ」

「驢」やれくどれもこれも、氣の毒な話し許り、で  
わ君もこーしなさい、私等わこれから東京え行つて、  
まー何か、死ぬよりわいーものを探そーとゆー咄な

んです、君わ先づ一番いー聲を持つてるから、どー  
 だね一所に樂隊になるーじやないか、すると君の聲  
 も又一層ひったつぜ』

そこで鶏もすぐ此説に賛成して、都合四人で以て  
 旅をすることになった。だんく行つて日の暮れ方  
 になつて大きな森の處え着いたからして、先づ今晚  
 わ、こゝで泊つて行こーと云ふ相談にきまりました、  
 驢馬と犬とわ一所に木の下の横になる、猫わ木の枝  
 にかき上る、鶏わ一番上の枝の方え飛び上つて、そ  
 れで皆が寝ることになりました。



處ところが鶏けいがズット高い枝えだに上あつて方々はうを見渡みわたした  
 所遙遠ところい所に當あつて、一寸ちよつとした火ひの光ひかりが目めに付ついた  
 そこで上うから皆みんなを起おこして其事そのことを咄はなして之これで見みる  
 とこゝわ余あまり人家いんかに遠とくあるまいと告つげました。す  
 ると驢馬うまが

『それじやー諸君しよくんどーです、夜分よぶんだけでももつ  
 と歩いていっその事こと其家そのうちまで行ゆく方がいーじやあ  
 りませんか、こんな冷つめたい所ところえ寝ねるよりわ』

犬いぬ然しかりく、おまけに肉にくの一片ひときれに骨ほねの二三本さんほんもあ  
 ると、とんだご馳走ちせうになれますよ』

猶贊成く

そこで其通り相談がきまつたもんですから、そんな  
らとゆーので、皆が又起き上つて、其火の方を目的  
にして、森の中を出て歩き出しました。

(つゞく)

源ちやんの英語

姉の房子が椽端で、編物をしてゐますと、座敷の方から弟の源坊が走つてきて、いきなり姉の膝の前へ座つて

源「姉さん、僕英語知つてよ」

姉「おや、そー!! ちやんのことねー、何といふの」

源「グッド、モーニン」

姉「ホッホ、ホ、ホ、それ何といふことなの」

源「おはやうといふことなの」

姉「では、ねこのことは 英語で」

源「キヤット」

姉「おや、えらいことねー、いぬは」

源「モンキー………うーん………そーでないの、

ドッグ」

姉「そんならねー おつかさんのことを何といふ

か知つて居るの」

源「おつかさんって? 知らないなー おしへて

頂戴」

姉「マンマー おつかさんのことは、マンマーだ

よ、そーいつてごらん」

源「マンマー、マンマー、

やがて、夕御飯の時に成つて、お父あんに、お母

さんに、兄さんに、姉さんに、源ちやんと、皆一

所に食卓の前に并ぶと、源ちやん、急に思ひ出した

様に

源「お父さん、僕ささ、姉さんに又英語ならつて」

父「おー、そーか、何といふのを教はつた」

源「あのねーお母さんのことを、英語でねー、

ごほんといふのよ」

姉「あら 源ちゃん 嫌だわ マンマーといつた

のよ』

兄「ハッハ、ハ、ハ、マンマーだから 御飯だ ね

一源ちゃん』

父、母、姉「ハッハ、ハ、ハ、ホッホ、ハ、ハ、オホ、ハ、

ハ、ハ、ハ、

源ちゃん、不思議そーに

『ではんでも、いゝんでせう ねー兄さん』…

(完)

母の誕生日

矢橋 小葩

けふは幸雄さんのお母さまの誕生日なので

姉さまのきぬ子さんと相談の上、お母さまへの贈

物として、花束をさし上げることに決めました。

で、ふたりは近くの野にまわりました。頃は四

月のはじめで、麗かなお太陽さまは、蝶々の舞や  
小鳥の歌などを、さもおもしろさうに、ニコニコ  
笑つていらつしやいます。

切角、来たことは来たが、大方他の子に前つま  
れて、たまに莖や蓮花草が残つてゐても、花束に  
するやうなのは、すこしもありません。で、二人  
はどんなに落膽しましたでせう。

でも、もつと行けば無いこともあるまい。と道  
を他にとつてまわりますと、やさしいく水の韻  
が聞えますので、その聲する方に出ましたら、い  
さゝ川がチヨロ〜と流れてゐるのでした。

『姉さま、ほら、あんなにー、』

と、見ますと、川向ふには蓮化や莖やたんぼ、  
が、それはく美しくう、まるで毛氈を敷きつめ  
たやう、一面に咲きそつて、可愛い小さな蝶が



澤山 うれしうに舞を舞ふてをります。

幸雄さんは、ホク／＼もので、さあ、行かうと思つて、橋をさがしましたが、どうしたのか土橋一つすら見えません。

『飛ぼうか？』

『だつてあぶ』

『ないわ』

『僕、だつて』

きついで』

『だけど』

止しよ』

『ね？』

『あぶないッてばー』



姉さんの止めるのにもかまはず 何五尺にもた

らぬこれッぽつちな川！

『「イニウ三イ……」』

とぽいと飛ぶと、ポチャン！

\* \* \* \* \*

ふと幸雄さんは我に歸つて眼を開くと、枕元に

は、お母さま 姉さま等か、心配からよみがへつ

たやうに、うつくしい微笑を以て幸雄さんを迎へ

ました。

『花は？』

とあたりを見廻しながら、かう幸雄さんが申し

ました時、お母さまはつと側に寄るや、薔薇のや

うな唇にわたゝかき接吻して、そして、皆と、幸

雄さんの『幸福』を神さまに、感謝し 祈りました。

(白鳳社編輯局にて四月十四日稿)

お笑ひ草

或時に和尚様が、子僧を困らせてやらうと思つて、

和尚「子僧や〜」

子僧「はい和尚様、何か御用で」

和尚「オー他でもない、お前は平生から中々伶俐

者で、時々此和尚もやられるとがあるがの

〜 どーだい、此湯呑へこーして湯を注い

でやるが、これを蓋して呑んで見ないか」

子僧「へー蓋したなり呑むんですか、畏こまりま

した」

と蓋した湯呑を手に取りらうとして

子僧「熱つ……オー熱い、和尚さん一寸、水を埋

めて頂戴、熱くつ〜とても手に持てま

せん」

和尚「ははわー意氣地がないの！ どれ水を少し

さしてやらうか』といつて和尚さん、蓋を

取らうとする

子僧「あつ和尚さん、蓋を取らないで、水をさ〜

なければいけません」。

● 明るる日になつてから 又和尚さんが、

和尚「子僧や〜」

子僧「和尚さん、何か御用で」

和尚「オー他でもない、一寸繩を持っておいで」

子僧「はい………これで宜しうございますか、こ

れで何を致しますので」

和尚「あの襖に書いてあるのは、何か知って居る

か」

子僧「へい あれは應擧の虎でござります」

和尚「そーじやお前一番其繩であの虎を縛るのじ

や」

子僧「へーあの書にかいた虎を、この繩で宜しい

和尚さん、私こゝで構へますから、和尚さ

ん向うへ廻つて一番あの虎を追ひ出して下

れさ』

### 摺み方

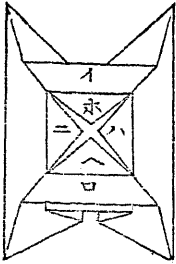
今度も又前のついでに、第一は額です、これは二艘船をひろげて、一圖のよーにし、その船の底てあつた所を、中央で合ふよーに、裏へ折るかえして、二圖のよーにし、そのイとロとの所を、三圖のイとロのよーに折り、又ハニホへの端を裏へ摺み込んで、四圖のよーにいたすのです、これ額か出來ました。

次は、朝鮮船とゆーのですか、これは三圖のハとニの端を持ってこれを引き出して、五圖のよ

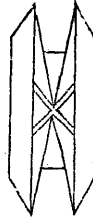
ーにし、そのイロハニの縁を、中央で合ふよーに裏へ折るかえし、六圖のよーになりましたら、その一方のはしへひだをとり、又縦に二つに折つて七圖のよーにし、そのイとロの所を持つて 中央のひだを残りなくのばしますと、八圖のよーな船か出來ます。



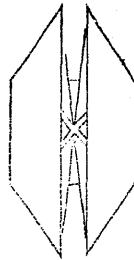
(三)



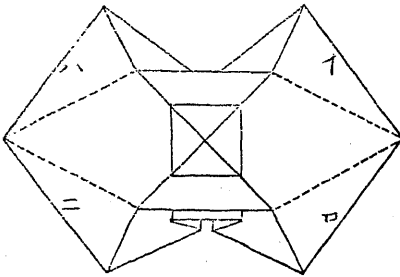
(二)



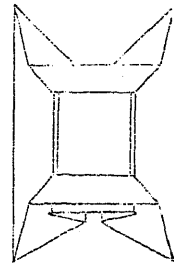
(一)



(五)



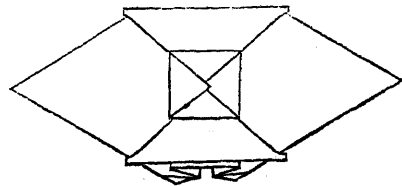
(四)



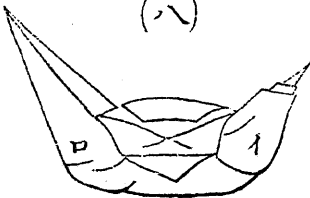
(七)



(六)



(八)



●考へもの

お酒呑が餘所から自分の好物を貰ったから、一人で片付けて仕舞ふのも惜しいものと思つて、友達をよびにやりました。其手紙が次の様なのです。

十字 横月 水邊有酉 二人上木

口近於天

どう云ふ意味でせう？

忠義な犬の話

やまとの翁

動物の話の中でも、殊に犬の話……忠義な犬や賢い犬の話は随分澤山あります。今翁が咄せうといふ様なのは、先づ少いでせう。

佛蘭西の田舎で、ある一人の商賣人、隣村まで貨金の催促に行かうと思つて、或日のこと、馬に打

ち乗り、日頃の愛犬を連れて出かけた。やがて向うへ行つて、首尾よく金を受取つたので、其金袋を大事にしかりと、鞍の前の處へ結び附けて、氣もかゝるゝと再び家路をさして馬を歩ませた、犬も主人の心を知つてか、前に立って見たり、後へ廻はつたり、跳つたりはねたり、或は吠へて見たりして、喜んで居る。

さて二三里も行つてから、先づ一体といふので主人は兎ある木蔭で、馬から下りて、止せば宜いのに、大事の金袋だからといふので、それを馬から下ろして自分の側へ置いて、而して煙草など喫んで方々を眺めて居る。馬は此間にと思つて、其邊の草を無暗と食べて居る、犬は『あ、勞れた』といふ風で、主人の側で前足を思ふ存分伸ばして、而して赤い舌を垂らして「ハッハッ」と息ついて居る。

『さー歸らう』といって、主人は再び馬に乗った、

乗のたは宜いが、さて大事の金袋を忘れたまゝ、行き出した、犬はさすがに氣が付いたので、すぐ其袋を引嚙へよーと思つたが、とても重くて、力が足りなかつた。それで、いきなり馬に追つついて行って、吠へて見たり、うなつて見たり、泣いて見たり、いやもーさまたまにして主人に思ひ附かせよーとして見たが、主人は一向に氣が附かない、で、犬ももー是迄と思つてか、今度は猛然と馬の脚に嚙み付き始めた。

主人は金の事には、少しも氣が附かないで居つたからして、先き程からの犬の具合を見て、大變心配し出して、殊に依つたら、こいつ狂犬病にかゝつたのかも知れないと思ひ附いた、屹度夫に違ないと考へつめて、小川の所へ來てから、ひよいと

振り向いて、犬が水を飲むか知らんと思つて見たが、忠義な犬は、中々そこ所ではない、一心に主人の事を思つて以前よりも一層烈しく、吠へたり嚙み付いたりする様になつた。

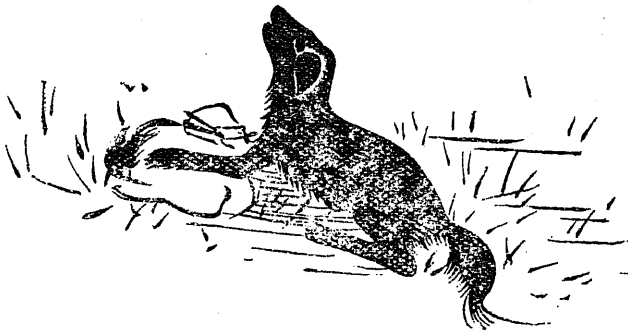
『こりや困つた、屹度夫に違ない、可愛相に狂犬病なんだ、どーしたもんだらう。あー困つたな、殺すより外仕様がないか知らん、夫にしても誰か來て己の代りに此役をして呉れる人があつてくれ、ばいーに……イヤ、こんなことをいつて居たつて仕方がない、早く遣つて仕舞はんと、自分の生命が危い、つまり飼犬に手を嚙まれる譯だ』

か様に言つて手早くポケットから、ピストルを取り出した、慄へる手にシッカと持つて、あはれにも此忠僕に狙を向けた。ズドンと一發、切つて放つと同時に顔を背向けた、狙は外れない、憐れな犬

は血に染れて倒れた、が健氣にも尙手傷に屈せな  
いで、さも怨めし相に主人の方へ這ひ  
寄らうとして居る。何という酷い有様  
だろー。

主人は此酷たらしい光景を見るに恐  
びないで、馬に一鞭あて、驅け出した  
けれども胸は悲みで一杯である、  
不憫な事だ、可愛相な事だといつて犬  
の事許りを思つて居る、そして金には氣  
が附ない、まー併し自分が犬に殺され  
たのよりは増した、など、思つてだん  
く乗り續けて居たが、暫らくする  
と、

『さー大變。己は余程馬鹿だ、犬も  
犬だが、すんでの事で大事の金をすつかり、失すの



であつた』といひながら、鞍の前を探して見た、が、

袋は見えない。

是に至りて始めて彼は氣が附い  
た。嗚呼馬鹿なことをした、罪は  
己に在りだ、犬のする事が讀めな  
いで以て、己はあれを殺して仕舞  
たんだ。氣狂所か己の失策を知ら  
せよーとしてあんなに騒いだのだ  
可愛相に彼は死んでまで忠義を盡  
さうとしたのだ』

すぐに馬の頭を向け直して、飛  
ぶか如くに元の場所へ引返した。  
途中自分が犬を殺した場所まで來  
ると、其處には血が一面にたまつて

草も地面も丸で眞紅になつて居る。何んだか一種



云ふにいへぬ氣分がする、犬はと思つて見たが、其邊には居らない。

と一々金を忘れた場所へ着いた。けれども其時の彼の感情は果してどんなであつたらう、彼の心腸は此場の光景を一見した許りで殆んど寸断した。不憫な犬は、もはや自分の敬愛せる併も残酷極まる主人に伴ふことが出来ない所から、あはれや其最期の一瞬間を以ても尙自分の職務に服することを決心した、全身血まみれになつた儘で、金袋の所まで這ひ戻つて、来て、今や死の間際の苦しみの際して、金袋の番をして居つたのである。

夫でも主人の顔を見るとすぐ尙尾を搖かして、喜の心を見させて居る。けれども、もはや何にも出来ない、立ち上らうとしたが、叶はない辛うじて舌を出して、残酷な所業の赦免を乞ふ積りで、悲

しみに充ちてさし出した主人の手を甜りながら、温な顔をして主人を眺めたが、やがて眼を閉ぢて陥いつて仕舞たといふ事である。

●前號考へものゝ解

- (一) 私は夜戻るのが恐いから(虫の名二) 蛭、蛙
- (二) 人力車夫とかけて、算盤と解く、心は掛けたり引いたり
- (三) めくらの障子張とかけて、氷と解く、心は、寒で張る
- (四) めくらの芝居見物とかけて、九月の花見と解く、心はさく許り(菊許り)

愛讀諸姉の一人から左の懸賞考へものが出ました、お考へ付きになつたら、遣つて御覽なさい。

◎懸賞考へ物

一、十一を二分して 世界中の一國名

一、二十を三分して 日本國內著名の高山

一、十四を三分して 裁縫方必需品

一、二十を三分して 我國著名の都會

一、十二を二分して 日々必需品

右五題正解答者には悉く雜誌壹部宛、其内壹番、

十番、二十番と謂ふ節番に當りたる方は婦人と子

ども貳ヶ月分の小爲替證書を差上げます。解答紙

に郵券五錢封入御申込なさい、〆切の明くる日よ

り景品發送します。御申込の際、郵券御忘れの方

は没書としますから御心得て下さい壹人りで多數

の御申込みは御断ります。

但し順番は發信局の消印によります。

一、〆切期限 六月五日限り

一、解答紙 隨意

一、申込所 愛知縣西加茂郡筋生村字黒笹五七

番 加納貞子

贊助者 鈴木はる

披露 七月五日發行婦人と子とも紙上

◎第貳卷第參號懸賞考へ物の解答

及び景品受領者の披露

一、十七を二分して農夫必需品 鍬(九八)

一、十六を三分して日本國內の一國名 石見(五八三)

一、十五を二分して人体中の一名稱 鼻(八七)

一、十三を二分して女子必需品 櫛(九四)

一、八を二分して獸類の名 獅子(四四)

右の如く解答せられたる御方には兼て豫告の通り

婦人子ども第二卷第五號

聊か景品を差し上げました、其の人名を披露して見ませう

第壹番	全	國史略壹部	大阪市	松田ちよ子
第貳番	全	壹部	三河	鈴木ひで子
三番	全	壹部	名古屋	石川つね子
四番	全	壹部	東京	増田きの子
五番	全	壹部	越後	佐藤さくへ子
第六番	全	中等作文全書壹部	東京	岡松磯
第七番	全	新式英語全書壹部	長野	飯島か津子
第八番	全	帖入訓蒙十八史略壹部	東京	安達きみ子
第九番	全	文章軌範貳册	伊勢	野呂仙三郎
十番	全	貳册	美濃	新田芳枝子
第十一番	全	日本通議壹部	肥後	古島六平
第十二番	全	壹部	三河	鈴木かなへ
第十三番	全	日本通議壹部	三河	武田まつ子
第十四番	全	訓蒙日本外史一册	東京	府佐藤信子
十五番	全	一册	仙臺	市五井まさ子
十六番	全	一册	備前	清水高代子
十七番	全	全	肥前	近藤てつ子
十八番	全	全	越後	矢野ひさ子
十九番	全	全	甲斐	後兩宮憲三郎
第貳拾番	全	全	越前	小林一男
第廿壹番	全	手拭壹部	甲斐	斐小野さくら子

廿二番	全	全	越前	赤井喬
廿三番	全	全	東京	市小出すみ子
第廿五番	全	手拭貳筋	廣島	市木内真子
廿六番	全	壹筋	埼玉	縣馬場さち子
廿七番	全	全	遠江	江生熊佐恵子
廿八番	全	全	千葉	縣山田さし子
廿九番	全	全	近江	福永すみ子
第叁拾番	全	手拭貳筋	香川	縣高畑あや子
叁拾壹番	全	壹筋	天津	市森對子
三十二番	全	全	肥後	縣毛利まさえ子
三十三番	全	全	肥後	縣中原ゆきえ子
三十四番	全	全	神戶	市浦木さき子
第三拾五番	全	手拭貳筋	甲府	市松野こう子
三拾六番	全	壹筋	大阪	市志方ふさ子
三十七番	全	全	群馬	縣都丸善作
三十八番	全	全	長崎	縣大浦加
三十九番	全	全	安藝	縣増川せつ子
第四拾番	全	手拭貳筋	甲府	市進藤りう子
四十一番	全	壹筋	東京	市星常子
四十二番	全	全	埼玉	縣金子源三郎
四十三番	全	全	東京	市楠田むつ子
四十四番	全	全	紀伊	伊佐々木君代子

第四拾五番 手拭貳筋

信濃 宮田 實

四十六番 全 壹筋

福岡縣 菊池 やゑの子

四十七番 全 全

秋田縣 八文字まつの子

四十八番 全 全

長崎縣 樋口くに子

四十九番 全 全

新潟縣 市川かく子

第五拾番 手拭貳筋

北海道石狩 儀 俄 文子

第五拾壹番 手拭壹筋

甲府市 依田 忠助

全 全

甲斐 河野 けん

全 全

美濃 安田 英子

第五拾五番 手拭貳筋

島根縣 宮田 たま子  
備後 後藤 常代

右景品金高七圓貳拾五錢也

附言 以上の番號は各地發信局の日附を以てし同

日同便は先き開きを初番と致しました、然し大

方婦人と子とも愛讀さるゝや否や御申越された

と見え、大方、同日の發信局の消印でありまし

た仍て少しは誤番の附け處もあるかも知れず、

そして又葉書或は郵券封入御忘れになつた御方

と、第五拾五番外の御方様合せて貳拾七名には

遺憾ながら景品の制限で、差し上げる事が出来

なかつたのは、悪しからず御心得て下さい、御

不審の御方様は往復はがきにて御照會になれば

御知らせませす、景品發送方は人に委ねましたか

ら貴姉様の姓名に誤字を書いたかも知れませ

ん、此の邊は篤と御察しの上、幾重にも御赦し

下さい。

解答なし下された諸子様一同に謹で謝す。

三河國西加茂郡筋生村字黒笹

近藤とき子



家庭



幼兒に言ふ小言

ひさ子

おまへはなぜそんな事をするか、どうしておまへはそんなにいたづらなのか、何時の間にそんなおかしやべりにおつたのであらう、どうして言ふことをさかないのか、なぜそんなにさわぐのか、など、小言を言つて、大人が怒に乗して幼兒のした悪い事の原因を詰問するのは、あまり幼兒を悪く見過ぎたり、又大人に見過ぐる話ではありません

まいか。九も幼兒と申ても、八才九才となれば段々わけが分てまゐりますけれども、六才七才の頃まではまだなか／＼そうはまゐりません。もとより、幼兒と大人は心身の發達が實にちがふものである、といふことは、何人も認めて居る知れきつたことではございませうが、其幼兒といふ中にも三才と四才ではどんなにちがふか、五才と六才ではどの位であるか、更に進で甲の六才の兒と乙の六才の兒とはどういふ風であるか、といふやうなことはよほど考へてやらなければ、幼兒にとりては迷惑な話であると思ひます。まだよく物事のわけが分らないで、自分と他人との區別、自分の所有物と他人の所有物との差別も十分でなく、自分の愉快ばかりをとりたい時代、むやみに物をこわして見たい時代などに、幼兒が前後の分別もなく

したいたづら、おもしるる半分に善とも悪とも知らずにした事、身体しんたいの活動かつどうのはげしい爲ために自然ぜんぜんに出る動作どうさなどを、一々つかまへてまるで故意こいにしたやうに大人おとなから叱しかられては、随分ずいぶん幼児えうじはつらい話でありませう。一体たいいつ幼児えうじのする良くない事ことの中なかには、眞しんに道德とうとく上じやう責せむべき事こともございませう。又衛またゑい生上せいじやう良くない事こともございませう。又作法さくはう上じやう良くないこともございませう。又多人またたにん數じゆう一緒しよに居ゐる處ところならば、管理くわんり上じやうそういふことをしては困こまるといふこともございませう。つまり幼児えうじの良くない行なほひの中なかには誠まことにいろ／＼の物ものが含まふれて居ゐりませう。又こういふ事ことをする幼児えうじの中なかには、良くないと知りつゝ故意こいにする眞しんに悪わるいものもございませう。何にも知らず、即ち、之これは良くないといふことをまだ大人おとなから教おしへられないために、平氣へいきでするの

もございませう。嘗かつて、一度いちど又は幾度いくばくも大人おとなから悪いと教おしへられた事ことながら、つひそれを忘わすれてしまつて、又またくりかへすのもございませう。此中このちゆうで故意こいにするのは除のぞきまして、次の二つは、幼児えうじが小ちひさければ小ちひさいほど多おほくある事ことであらうと思おもひます。ほんとうに幼児えうじはまだ善惡ぜんあくの判別はんべつがつかないで、大人おとなから教おしへられ教おしへられる爲ために、其判別そのはんべつが段々だんだんたしかになるもの、又意志またいしが十分に發達はつたつして居ゐらぬものですから、一度いちどや二度にど言いつてさかされたからとて、まだそれを自分じぶんで實行じやうこうしようといふ處ところまでゆかないものですから、もし知らずにした悪い事わるいことならば、まづそれはしてはいけません。もし又また、知しつては居ゐるがつかひ忘わすれたのであるならば嘗かつて教おしへた事ことを思おもひ出だすやうに注意ちゆういを與あへてや

るか、或は更に新しく、それはいけないといふことを言てきかせてやるかしなければなりません。

こうした場合にまで、何故したかと詰問するのは、適當な方法ではありません、尤も、詰問して至當である行及幼児もありませんけれども、そうでない方が多数であつて、つまり短氣を起して感情的にガミ／＼言ふ小言は、少しも幼児を良くする上に益のない事で、却て害を殘します。よほど氣長く訓へ導いてやらなければ、眞に良い人になるものではありません。そこでまづ、大人は、幼児のある良くない行に接した場合に、靜に且つ敏捷に其行の種類、輕重、及之に付ての訓へ方、叱り方などを考へてそうして、後に最も良い方法をとるべきでございませう。

そうして、幼児の爲には、何時でも、幼児は幼児

相應の知情意を有て居るもの、幼児には幼児相應の道徳があるもの、幼児の道徳的感情は萌芽はあられるけれどもまだよく成長して居らぬもの、今現に四邊の境遇や大人の教導のおかげで、其萌芽は大きくなつて行くものである、といふことを深く考へてやる必要があると思ひます。

家庭に子供の必要なること

大阪 小島松之助

◎プラトンの謂へるが如く、家庭は夫婦并に子供  
の三人物よりなれる團體なり。夫婦間に生ずる子  
供は家庭の全調和に必要なものにして、子供な  
ければ夫婦の諧合其極に達せず、眞の家庭をなす  
能はず、自然の大目的たる種族の繁殖も出來ず、  
又、夫婦間の愛情は假令濃かなるにしても、夫婦



的慈愛的及孝心的の三つの愛情が互に相反感して所謂三位一体とならざれば、其哀惜に於て満足せしめ能はざる欠点ありて、完備調和せる眞の家庭といふべからず。

◎世の人々は男子と女子とは孤立すれば、比較的不完全にして兩々相俟ち、相共働して完全なるものなりとの眞理を認むるも尙ほ。家庭が完全に調和、整頓する爲には子供の必要なることを注意せざる人多きが如し。

◎家庭が完全なる爲には必ず、父母及子の三要素并に其和合が必要有益にして實に人生の快樂中家庭に於て父が慈嚴に指揮し嬉々たる愛兒に圍まれて母が温和に壓むところの家庭團樂の清淨濃暖なる快樂に比すべきものあらんや。又、父母は子供により幸福、有益なる感化を受くるものにして、

例は父母の心情に霽々たる慈愛親切の温情を維持活動せしむるものは子供にして、子供なき老男女には此温情は早く凋萎せるにあらざや。

◎又子供は父母の血統を永續せしむるものにして親は其親愛の情により子供の爲に艱難、盡瘁するを喜び、此子寶を生みたる母に對し、父の愛重心を増すものなり。又、子供生すれば夫婦間の愛情も更に一層、濃厚確實となり、夫は只に子供其ものを愛するのみならず、子供の母をも愛し、加之ならず、已れ自身をも爲に愛重するに至る。

これ、愛情が人類社會に貢獻する最も大なる部分にして、夫婦并に子供の諧合を確固強盛ならしむる所以なり。

◎純粹潔白なる家庭に於ける諧合の樂みは世略の艱難により勞疲し又數々、憂鬱なる厭世氣風を帯

べる人々の精神を休養すること恰も彼の神代史に所謂、回齡の神泉の靈驗ありしが如し。

人々が愛子、愛孫等の清淨無邪氣なる精神中に已の精神を常に浴せしむるときは、氣風快活にして老年に至るまで所謂、心情の永久なる妙齡を保ち得るものなり、心情老衰せば凡ての幸福も單に虚形たるに至るべし。

◎子供の有益なる感化は之を養育する父母の恩恵の大部分を酬ゆるものと謂ふべし。

◎子供の實に言ふべからざる厚意親切は私慾なる獨身者には到底感知せざる天恵ともいふべくして人類の義務を果して自然の大法則に忠順なるもの正當なる報酬といはざる可けんや。

傳染病

醫學士 長瀬復三郎

(二) 風疹

之は麻疹に似て發疹するもので、麻疹の流行の前後に流行します。そうして之を輕症の猩紅熱又は麻疹とする學者もございしますが、麻疹又は猩紅熱に一度かゝつた幼兒でも此病にかゝり、又麻疹の前後にはやるを見ても之を特別な病とする方がたしかです、此病は器具又は人から傳染します。そうして主に二才乃至十才の兒が侵されます。潜伏期は二三週間です。又は潜伏期なしにすぐに少し發熱して面部からはじめて發疹します。其疹は麻疹のに似て居りますが、幾分か大きく皮膚より高まり留針の頭、又は櫻實大で紅色です。それより二日乃至五日で疹がなくなります。麻疹とち

がふ處は落屑のない事、又熱もさほど高くない事、喉頭にカタルの徴候のない事などで、まづ輕症の麻疹のやうなもので経過は平易なものです。ですから合併症又は餘病のうれふべきものもなく又甚しく傳染もせずつまりさほど恐るべきものではないとせまへん。

#### (四) 痘瘡(眞痘又天然痘)

之は現今は極稀で東京で一年中に十人許あるのみです。之はゼンナ氏の種痘法のはじまつたれかけで、それまでは随分此病にかゝつたものです。西洋でも昔十五六人の死者の中に一人は天然痘の者があつたさうでして、日本では天平七年に大に流行したことが歴史に見えて居ります。

此病は種痘の時にできるやうなものが、全身にできるのです。種痘の發見は牛に天然痘のはやつ

た時に、其乳搾りが傳染し全身に天然痘でさたることより創意せられ、遂にはゼンナ氏の發明となつたのです。それは西曆紀元一千七百九十六年のことです。日本には文政嘉永の間に此法入り來つたさうです。實に其御蔭で今日の人は痘瘡に對する人工免疫を得るのです。

種痘には漿液を用ひます。之には三種ありまして、一は原漿と云て天然痘の牛から直接にとつたもの、一は人漿と云て原漿を人に接種し其人よりとりしもの、一は歸種漿と云て牛痘を人にうゑ之に感じた人の漿を又元の牛にうゑ感じたる痘の漿です。此第三が今日一般に用ひられて居ります。昔は原漿を多く用ひました。人漿は危険です。それは其とつた人に結核、梅毒、癩病などがありますと之をうつす事があるからです。牛にも亦結核

性のものがありませんから。歸種漿でも良い牛を撰ぶことが肝心です。牛の結核の有無はツベルクリンに由り其反應に由て判断します。

日本の種痘規則に由ると、生後一年以内に第一種をなし、之が不全感ならば其後一週間に又今一度する規則です。最も早い限は生後三週間に長すでも害はないと言ひますが大抵六ヶ月位生長するのを待つ方がよろしい。しかし天然痘の流行でもある時ならば早くした方がよろしいでせう。

種痘には刺種、切種の二法があります。刺種は殺菌した針でうゑ、切種は殺菌した小刀で皮膚を切りてうゑるのです。今其経過を申しませう。接種の初には赤くなり、二日目には其紅色消散し三日目には粟粒のやうにかたまりとなり、四日目には其かたまりが大きくなり水泡でさ、其水泡の中

に人漿液あり、五六日目には其水泡漸々大きくなり、著明になり幾分か發熱して七八日目には熱高く且つ、痘瘡は全く形づくらる。其形は( )のやうです。中の漿液は混濁をはじめ、化膿をはじめ九日目位より惡寒もなくなり、熱も減り全く化膿し、十八日頃より痂皮でさ粉となりてとれ、二十五日頃までに全くとれてしまひ著しき斑痕を残します。右は種痘の経過ですが天然痘は全身が此通になり又症状もはげしいのです。

幾回種痘をすれば天然痘に對して、免疫となるのか、今日の處では明ではありません。しかし一回の種痘は凡そ三年間位免疫であるやうです。日本の規則では五年乃至七年内に再種もしくは三種すべしとあります。そうして二十才までに三種すれば先免疫を得たと認めていゝやうです。しかし

用心の爲に五回位してもよろしい。いつでも不全感ならば三度位でもよろしい。又三度とも全感ならば五度もしなければなりません。

幼児が第一種に少しも感じないのは其兒が天然に天然痘に對して免疫質を有するか、又は母が妊娠中天然痘にかゝつたか又は漿液が不良であるかによるので、此外の場合には何日でも全感でなければなりません。

今いろいろは料理

石井泰次郎

(よ之部)

よもぎ汁

よもぎは灸治に用ふるによつて、モエ草といふ、もえくさといふを略して、もぐさといふ、春月若

葉を採りて羹とし、又飯に加へて食す、三月三日に餅に和して食す、煮て乾し蒸て餅に加へ搗て和らげて食するも亦可なり、と益軒貝原先生が大和本草にかゝれてあるものなり。

さてよもぎを汁に仕立てるには、ちづよもぎをつんで、其葉はかりを摘とつて、莖はつかはず、水であらつて、是を庖丁刀でこまかにきざんで、又鹽をふりかけて箆の中などにて揉んで、又水であらつておき、

別に汁の方は、並みそと白みそと合せて使ふ時は、並み白の倍にして合せる、先しろみそを搗盆ですつて、次に並みそをする先の白を馬尾節のうららにのせて木抄子でねしてこして、次に並みそをうららごして、合せてだし汁でとくのです、其とき方は、水四合に、かつをけづりたる五匁ぐらゐのわ

りで、

かつをぶしを、すこしぬるま湯へひたして置いて、  
 取あげてあらつて、其上の白い所を出刃庖丁刀で  
 削りおとして、かんなにて上つらをかきて、すて  
 、其あとの正身をけづるのです。

そしてけづ、たのを、湯の煮え立た泡のたつた  
 中へいれて、すぐに鍋をおろして、泡をすくひさ  
 つて、絹で漉してかすをさつて用ふるのです  
 右のだしで味噌をといて、煮立て、よもぎを入  
 れて一煮え煮たて、次に豆腐をさええ形に切て入  
 れて、直に鍋をおろして、椀にもるのです。

三つ身綿入羽織

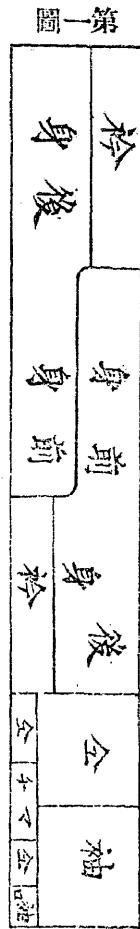
岡 本 ち か

三つ身羽織は二三歳から四五歳位までの子供の  
 着るもので其用布は大抵常幅一丈四尺位あれば出  
 來ます

普通裁切の寸法

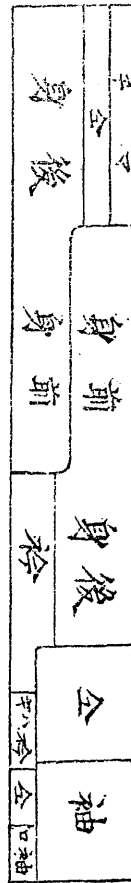
- |     |                 |      |      |
|-----|-----------------|------|------|
| 一袖丈 | 一尺五寸            | 一袖幅  | 七寸四分 |
| 一後丈 | 二尺五寸            | 一前丈  | 三尺   |
| 一後幅 | 六寸三分            | 一前幅  | 四寸七分 |
| 一衿肩 | 一寸六分<br>(内三分廻す) | 一衿幅  | 三寸一分 |
| 一衿丈 | 四尺四寸            | 一袖口丈 | 一尺一寸 |

(圖の方裁 一)

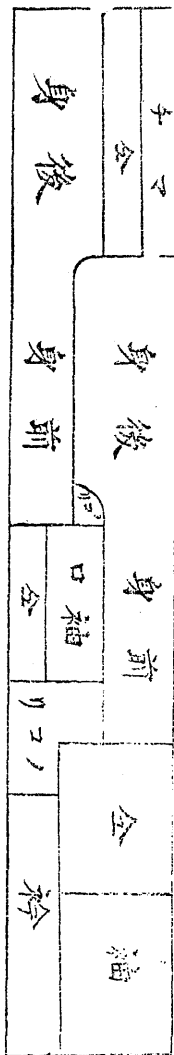


右の裁方第一圖、第二圖、何れにても其子供の體質、切地の如何などによりて都合よろしき方にすればよろしうございませ

圖二第



(圖三第)



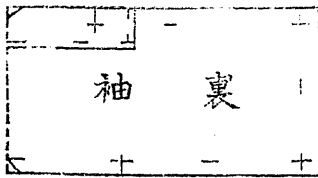
身頃は裏となりて不都合ですからお裁の場合には次の如く裁てばよろしうございませすかし切れの幅少し廣く一尺位なければ不都合ですが御参考までに記して置きます (第三圖)

- 一 仕立上寸法
- 一 袖口明
- 一 袖幅
- 一 袖丈
- 一 袖附
- 一 身丈
- 一 身八ツ
- 一 前下リ
- 一 紐附肩ヨリ
- 一 身幅前後共
- 一 襠幅
- 一 衿幅
- 一 一寸五分
- 一 四寸五分
- 一 四寸
- 一 一尺四寸五分
- 一 一尺八寸
- 一 二寸五分
- 一 七分
- 一 五寸五分
- 一 一寸五分
- 一 上六七分
- 一 一寸三分



一縫標附ケ方

袖 先づ表袖に山、丈、(出來上り寸法より一分長く)袖口明、袖附、袖幅などの標をなし次に裏袖に袖口切を載せ表袖に準じて各部の寸法を五厘位づゝつめて左圖の如く縫標を致します尤も袖口下の縫代は表二分裏は五六分の深さに致しませんと綿をふくむに困ります



一、身頃、襷、衿の縫標附ケ方

前に掲げたる一つ身袖無羽織の時と略ぼ同じ事で唯身頃に春縫の標を附けると寸法が少し異なるばかりですから省きます

一縫方

袖、先づ表袖を縫印の通りに縫ひて襟をかけ次に裏袖に袖口をかけて後縫標の通りに縫ひ其所に襟をかけます、身頃、まづ前後の胴はぎをして春縫をなし前下りを縫ひ襷を左右に入るとなど總て前の一つ身と同じく致します次に表裏の袖をつけ後綿を入れるのですが其前に袖口と八つ口とに綿を二枚宛位くるみ置く方が便利でございます

縮け方、綿を入れたらば第一に裾口を假綴なし次に袖口八つ口とをくけそれから春縫と前襷との縫目をとち次に衿附の所を假縫なし紐附をつけ後に

袴をつけるのであります、袴の附け方、一つ身の時とおなじ事ですから省きます

小さき日記

(三十三年七月生男子)

印 東 音 鳴

二十三日。四五日前より來りし下婢を嫌ひ、顔を見る毎に(パッ)と大聲にて叱り(スー)と手にて押す形を爲す。

二十九日。親戚よりお歳暮に靴を戴き、初めて履物をはく(タアタ)と喜び、はけどもくすくぬげて仕舞ふ。坊は何歳と問へば、姉さんの真似をして右手を廣げて出す。

明治三十五年一月。

一日。炭を食べ口を眞黒にす。馬大好きにて婆や

に負はれ、馬の美しく飾りて通るを見喜ぶ

二日。朝初めて庭を歩む、靴はさて。味柑すきにて(ガン)と言ふ、丸のま、渡せば(カ)と云ふ、皮をむけと云ふ事なり。

三日。桃太郎の話喜んで聞く、わざやわくと赤チヤンが生れてと云ひしに(ニヤア)と真似す。

四日。乳呑まんとして(アタ)ト、クント)といふ。お茶がすきにてお茶とお湯とある時には。必ずお茶でなければ承知せず。

桃太郎さんは何と泣くかと問ひしに(ニヤア)姉さんとはと云へば同じく(ニヤア)。

六日。日本一の黍團子と云ひしに、お重を爲す興へる真似をせしに食べるまねをなす。

三十五

手にしもやけ出來居り（イタイ〜）といふ。

近所の子供の泣くを聞き（アー）と真似る。

十日。（あぶ〜）と云ふ故、鐵瓶の湯を注ぎしに首を振り、土瓶を指さす、土瓶のを注ぎしに未だ茶を入れざりし爲、氣に入らず泣く。

十一日。蝦を見て姉さんがゑびと教へしに（エビ）と云ふ。

毎日夕方食事の時かかゆ食べかけて（ポー〜）と悲しき聲して母の膝に上る、又（わか〜）と云ふ事もあり。

ポーとは工場の笛にて、食事の頃鳴るなり、アカは犬にて。抱かれたき爲の口實ならんか。

十三日。寐床に居りて姉さんの昨夜頂さし味柑を嬉れしげにかもちやに爲し居りしを見つけ、床をはい出し姉さんの床へ押かけゆき、遂に取り、に

こ〜として歸へる。

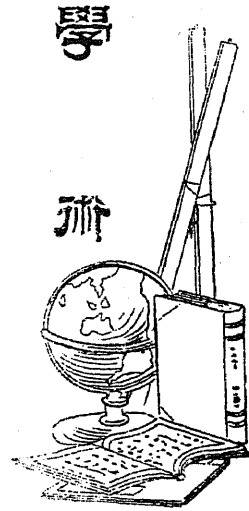
食物其他氣に入らぬ事は（イカン〜ス〜）と打つまねをす。

ポンプ（裸）イッダ。アッコ。アコン。オクンナ（くれ）など云ふ。

婆ヤの氣に入りの時は（バーバ〜）とやさしき聲にて呼び、氣に入らぬ時は（バ〜）と大聲にて叱る。

十八日。夕飯の時魚の脊骨をつかみ（オンマ〜）と喜び御飯を食べさす。

二十一日。婆やに負はれ知已の家へ行き、味柑を貰ひ眠りて歸へる、背より下ろせしに眼さめ、しきりに兩手を眺め泣き出す、眠りし間に味柑落せしならん。



鐵道の話 (承前)

菊亭

さて茲には車輛の起源沿革に就て一言申上げます車輛と申しましても機關車と其他の車とに區別して申上げましたかた記述上便利でありますから、此區別に従ひ最初に貨車に就て次に機關車に就て申上げます、客車、手荷物車、郵便車の如きは鐵道の起源と併せて申上げるはと古く用ひられたものでありませぬから、此等の種類は略しまし

て貨車のこのみ申します、

貨車の方は何時頃より用ひられたかはチヨット穿鑿がといきませぬが、前にも申上げました通り木道の出來た時分には馬車に用ひた車を其儘木道上を運轉したものとかもはれます、木道が出來ましてからは従前の如くデコボコした道路を運轉するに比すれば自由に抵抗なく車が轉輾しましたから運送する人も慾が出來して車體を大きくして一度に澤山の石炭を運搬せんと致しました、然るにレイノルズといふ人が鑄鐵製の軌條を製造せし以後は、木道又は鐵張道の時の如く軌條を直接に土面に置かずして鑄鐵製の軌條を長さ十五呎毎に之と交叉して横に枕木を入れて軌條を支へさせて軌條を土面より離すことにしましたから、大なる車輛に石炭を滿載して其軌條上を運轉すれば折々軌

條が重量に堪へずして破損することが起り、また、依てこれではならぬといふので軌條に改良を施さんとすると同時に車もまた改良せんとて實際事に當るところの技師連中が工夫の結果、車體をズット小さくして軌條の受ける重量を少なくしました、併しそれでは一度に澤山石炭を運搬するところが出来ぬからその小さき車を何輛も連結して運送することになりました、これが今日見るところの列車の起源であります誠に譯もないことのやうでありますが此の改良といふ者は大發明といはなければなりません、これより後にありてはいろいろ貨車に就ての改良、新發明もありませんが今申した大改良の如く取出て、申上げることにはありません、

次に機關車の出来ましたのはどういふ譯かとい

ふに馬や牛の力をかりてやるやうではとても充分でないといふより發明を促したことは勿論でありますけれども、例のワットの蒸汽力に就ての大發明は機關車の發明に與りて大に力ありといつてよろしいとおもひます、鐵道の線路や貨車は從來ありたるものに改良を加へた結果發明も致しました、機關車は之とは少し趣を異にしたもので曾て世上に例のないものを造り出したものですから無理な言葉ではありますませんが根本よりの發明とでもいつてよろしいとおもひます、千八百十八年頃英國にてダーリントンとストクタトンとの間に鐵道を敷設せんとするに方り此鐵道には是非とも一種異なりたる動力を有する機械を工夫して運送上に大改良を行はんとことをおもひ立ちて技師間の大問題となりました、何人も大發明の名譽を博してヤン

ヤと譽められやうとして苦辛のほどは容易ならぬ  
 ことであつたとつたへられて居ります、當時の鐵  
 道に従事して居ましたトレヴィシツクといふ人は  
 早く設計を立て、製造しました、此機關車は隨分  
 不完全の點も有りましたが機關車創造の名譽はこの  
 人に與へなければなりません、その後はかの有名  
 なるジョージ、ステフエンソンが更に機關車を製  
 造いたしました、此機關車はトレヴィシツクの機  
 關車の不完全なる點を改良したものであります、  
 寧ろ新に發明したものといつてもよろしいのであ  
 ります、千八百二十六年頃英國に於てリヴァー  
 プール及マンチエスター間に鐵道を敷設するとき  
 今度はなんでも完全なる機關車を用ひやうとかも  
 ひまして發明を促がしましたが、只ではとても左  
 程の效能もあるまいといふところから懸賞の條件

に合格した機關車を製造したものは五百磅の賞  
 金を與へんことを定めて之を世上に公布しまし  
 た、サアそうなると地獄の道も金次第と申す通り  
 金といふものはおそろしいもので我こそはその賞  
 金を得んものと意氣込みも容易ならぬことだそう  
 でした、さて締切期日となるといろゝの設計で  
 出來た機關車が出て來ましたそこで千八百二十九  
 九年十一月八日より十四日まで一週間試運転を致  
 して優劣を判定した結果、終に四つの機關車に賞  
 を與へましたがジョージ、ステフエンソンの製造  
 に係る機關車はその中の一等でリヴァープール及  
 マンチエスター間の鐵道の開業せらるゝときに採  
 用せらるゝこととなりましたまことに名譽あるこ  
 とであります、此機關車はその名をロツケットと  
 命じたもので今に英國に保存してあるといふこと

であります、我國の鐵道には客車にても貨車にて

も將又機關車にてもロケットの如く固有の名を

命じたものはありませぬが外國にては現今にても

命名は盛行はれて居ります、船には我國にても

秀吉の命じた日本丸を始めとして昔より命名して

居りますから、どうか鐵道の車輛にも一新例を開

きたいものとおもひます、軍艦には初瀬、富士、

曙など、優美なる名を命じて居ります、鐵道車輛

にも何とか命名したらは殺風景なる事業も名聞だ

けでも少し優美になるであらうとおもひます、餘

計のことなからかもひとついた次第を申上げおさま

す、

以上述べましたところは今日見るところの機關

車にて他の車輛を連結したものを牽引して一つの

運送事業をなすに足るだけに發達するまでの線路

及車輛の起源沿革であります、勿論此時代に於て

は鐵道の事業は石炭の運送を主としたものであり

ますから客車といふものは未だ發達して居りませ

ぬ時と御承知を願ひます

(未完)

夢のはなし (ついで)

東 基 吉

前號では、睡眠のことと、夢を見る時のこと、夢  
の原因などの事に付いて記して見たが、今度は大  
体

夢とは如何なるものかといふとに付いて書いて  
見たいと思ふ。考へて見ると夢の世界ほど不思議  
なものはない。現實の世の中では到底出来ないこ  
とが、夢の世界では譯もなく出来る。吾々は子供

の時に、よく羽が生へて瓢々乎と獨り手に空中を飛び歩く夢を見た。かと思ふと又溺れもしないで水の面を平氣で歩いて居る、時には地面を掘ると彼處からも此處からも銀貨や銅貨が轉かり出て來て拾ひきれぬ様なこともある。或は高い高い屋根の頂上から急に落つこちたと思つて愕然として目を覺ますと、何でもない、脚を立て、寢て居たのが、知らないで其脚を下したのであつたり、又冬の寒い晩、炬燵に足を穿つ込んで寢て仕舞つて、夜中に大火事に出遭つて身體中こげ相に熱いと思つて驚いて醒めて見ると、安んぞ知らん炬燵の火が少しばかり足に觸つたのであつたりすることが度々ある、夫からまだ面白いことは、今東京に居るかと思ふと、忽ちにして大阪の邊へ行つて居る、今學校で友達と一所になつて、遊戯でもして居る

と、思ひも寄らず、何時ぞの昔か彼の世の人となつた、年の寄つたおつ母さんまでが遊び仲間に入つて、キヤツキヤツと言つて騒いで居る。夫に自分は不思議とも何とも思はないで友達に紹介したり何かして居る。實に夢に於ては、聯絡も關係もない雑多の事柄が、夫から夫へと結び付いて、際限も止度もなく進んで行くものである。けれども、要するに吾々は決して以前に見たり聞いたりして居ない者は、夢の中には顯はれない、全く無關係な、全く知らない、一向經驗しないものは、決して夢には見ないといふのは事實である。成程時には思ひ懸けない事を夢に見る、併し夫でも夫は何時か見たか聞たか、乃至は考へたかした所のものが、現の時には忘れて居たのだが、夢になつて忽ち顯はれて來たものである。だから夢といふ



ものは、取りも通さず、吾々のこのろの

思ひ返しの作用 である。一度経験した事を思

ひ返すのである。尤も、思ひ返しの作用には、

二種の區別 がある。一は、以前経験した所の

事を、全くありの儘に、少しも違はない様に、例

令ば、何時何日、自分はかくくの處でかくく

の事實を経験したのだと云ふ様に思ひ返す、之は

心理學上で通例記憶作用といふのである。他の一

は之と同じく、思ひ返しには違ないけれども、以

前の儘に少しも前と變らぬ様に、思ひ返すのでは

ない。(だからた、思ひ返すといつては謬弊がある

かも知れない。)即前に経験した事柄を、種々に形

を變へて、種々な風に極めて自由に、心の中に再

現するのである。心理學上、此作用を想像といふ。

だから、想像作用では、其心の思ひ返しの作用が、

頗る

自由なのである。 例令ば、吾々は鳥の空中に飛

行自在なのを見て知つて居る。處で、吾々は、之

を種々に形を變化さして考へ出す事が出来る。吾

々は通例歩くより他には出来ないけれども、想像

で以て、自由自在に羽を生して、空中を飛行する

事を考へることが出来る。これは畢竟、鳥が飛ぶ

のを経験した其経験を、今度は飛ぶ事か出来ない

人間といふものに變化して心の中に再現したので

ある。吾々の想像は此通り、現在の出来事に超絶

して居つて、至極自由である。其範圍は茫漠とし

て際限がない、人間の考と云ふものが、只だ何處

までも現在に束縛せらるゝものであるならば、人

間といふものはまことに不幸な、まことに果敢な

いものであるけれども、幸にも此想像の作用がわ

るからして、大に幸福な生活を享けることが出来るのである。吾々の今日の生活は實に憐なものである。吾々の家は只だ膝を容れるに過ぎない、吾々の衣服はたい寒暖を覆ふに過ぎない、食ふに美味のあるでなく、のみならず時には明日の糧を如何にせんと悶へることなど度々ある身分である。併し、想像の作用は、此缺乏だらけの生活の間に居て吾々に偉大な幸福を興へる。吾々は將來を想像して、世界中の富を集めたる王になることも出来る。どんな金殿千樓に住んで居るとも想像せられ、或はどんな大事業でも完成する事も考へ付かれるのである。要するに只だ現實の處では實にどこへ行つても頭がつかへる様であつても、想像の作用となると、天地に亘り六合に擴かりて吾々の心を走らせることが出来るのである。處が此想

像の作用は

又二種に分れる。一は何ても自分で題目を決めて想像するので、一は別に想像しやうと思はないで居つて、併も種々の想像が獨り手に、夫から夫へと取止もなく心の中に起つて來るのである。そこで、

夢は畢竟此第二種の想像に屬するのである。

(未完)





史傳

津崎矩子 (ついき)

下村三四吉

前回到述べたる將軍養君問題に關する運動の京都に盛んなるに當りて、近衛忠熙公は已に左大臣に進みて、關白候補の位地に立てり。位地高きが上に主上の信任甚だ深く、望を天下より屬せられぬ。この家は、我が國初以來常に皇室と相關聯して休戚を共にせる藤原氏に出で、公が忠貞の節、憂國の念は、かゝる時勢に遭遇して愈々固く、益々盛んにして、京都に於ける尊王攘夷黨の推戴す

るところとなれり。されば、公が朝廷の上にて要事繁多にして匆忙を極めらるるは、言ふまでもなく、公退の後は有志の士その門に出入するもの常に絶えざりき。村岡は、幼より近衛家に仕へて、深く忠熙公の愛用を受け、忠實かはることなく、また夙に干事を憂ひ、義侠の氣、丈夫も及ばざる概あり。故に志士の公に依らんとするものは、先づ村岡に依頼してその執成を得たり。當時公を慰め、公を輔けまた、公と民間の志士との間の橋梁となりしは村岡の方實に多かりき、村岡時に、年既に七十に餘れり、意氣壯なりといふべし。かくて、西郷隆盛、橋本左内等は、堀田正篤が米國との通商條約締結の勅許奏請のために上京せる間に(安政五年二月より四月初に至る)、近衛公を初めとして、鷹司、三條等の諸公卿にも説きて、

一橋慶喜が養君として決定せらるるべし。内勅が堀田閣老に傳へらるるまでに運びたりにし、當時關白の要職に在りし九條尙忠は紀州派に勸説せられて紀州養君の説に左袒せしかは、一橋派の苦心も甚だ望少なきに至りぬ。

堀田閣老は條約締結の勅許を得ずして四月二十日に江戸に歸れり。堀田は將軍養君問題につきては一橋派なるを以て、紀州派は前にいへるか如く種々の謀計を運らして一橋派を妨げ、將軍家定をして慶喜を厭嫌するに至らしめ、また首席の閣老たる堀田を制してその勢力を挫がしめんため、近江彦根の藩主井伊直弼を擧げて大老に任せしめたり。これ方に堀田が歸府せしより僅に三日の後なり。直弼は徳川氏隨一の功臣の家より出で、その門閥、その地位、頗る高く、豪膽にして、

勇決果斷の資に富めり。幕府大奥の推薦するところとなりし直弼が、將軍養君の問題につきて、いふまでもなく、紀州派を庇護して一橋派を抑壓せしより、局面は更に一變せり。

井伊直弼の就職の初に當り、養君問題の外に、外交問題は焦眉の急に迫れり。由て「ハルリス」に對しては、條約調印の延期を請求し置き、直に養君治定の事に従ひ、六月二日を以て記伊慶福を迎へ立つるの議を決し、同廿二日京都よりその勅許を得たり。こゝに於て、廿五日、養君決定の旨は、公然天下に告示せられ、慶永、齊彬、橋本、西郷等の苦心も、終に水泡に歸しにき。これにつきて大に盡力せりし村岡が失望や如何なりけん。

一波未だ収まらずして、一波更に來る。養君問題と相前後して、彼の通商條約調印の大事件は起

りぬ。此時「ハルリス」は上言して、英佛の二國軍艦四十餘隻を卒る清國に於ける戰勝の餘威を以て來りて我が國に臨まんとすることを告げ、早く條約を結定するの利を説きたり。應接使井上清直岩瀬忠震の二人は、終に去冬定むる所の通商條約草案に就きて月日を記入し、調印を終れり、時に六月十九日なり、幕府の久しく憂慮せりし條約調印の事、こゝに至りて、終に斷然たる處置を見るに至れり。

井伊直弼は、勅許を待たずして通商條約に調印したるさへあるに、その次第を奏問するに特使を派遣せず、六月廿一日宿次奉書によりて之を達せり。こは今日の郵便の如きものなり。水戸齊昭、尾張慶恕、松永慶永等は、打揃うて登城し、直弼に對して、はげしく違勅の不可を詰責攻難し、尊

攘の志士は慨然として起ち、聖上かしくも「位山、神の心やいかならん、愚なる身の居るもかしこし」また「茂り合ひしげりわひたるばらすゝ、あるにかひなき武藏野の原」と震怒あらせられ、朝議は沸騰し、幕府は上下非難の中心となりぬ。正に是れ「山雨欲來風滿樓」の狀景

六月廿九日、三家或は大老の内にて早々上京せしむべき旨の勅書は、江戸に向つて飛びぬ、折も折とて、將軍家定はその七月四日に薨去せり、露國の使節は江戸に入り、英國の軍艦は品川灣に進ませり。内外の多事言ふべからず。直弼は勅命の趣きは必ず水戸齊昭の手入れに出でたるものならんと思惟し、將軍の喪は秘して之を發せず、同じ六日將軍の命と稱して突然齊昭を駒籠の邸に移し、尾張侯慶恕、越前侯慶永に退隱謹慎を命じ、

一橋慶喜の登城を停止したり。大波瀾の起るべき  
機運は、刻々に其勢を高め來れり。(ついで)

(正誤) 前號の本文中、三十八頁下段の五行に「三橋の一  
たる」さあるは、「三卿の一たる」の誤植。また四十頁下段  
の十二行「天璋院夫人」は、天璋院夫人の誤植。

日本のこのくにふりのかしこさも

やまごころばの上に見えつく (近衛忠熙)

月はなほ春のならひにかすむ夜も

さやかに見ゆる花のいろかな (同上)

うしと思ひうれしと思ふもこひ慕ふ

こゝろひさつの迷ひなりけり (同上)

盡忠全節身魚耻、懷古傷今悶難禁、(橋本左内)  
囊裡疏書悉心血、袖中詩卷半精神 (同上)



落花文

苑

鷺

水

池の花

池のかなたの

すがたをうつす

そよとの風に

ヒラ／＼と散る

野の花

暮れゆく春の

ちりにし花の

戀しき野邊を

こゝにも迷ふ

水の面に

稚子ぞくら

はかなくも

うつの世や』

夕まぐれ

跡とひて

とめ來れば

蝶胡蝶』

春 (唱歌)

わが行く野山は  
わたる小川の  
わが袖かへせば  
わが手をあぐれば  
そよ吹く風は  
たなびく霞は  
うべこそまつらめ  
春よくくと  
わが世はくれぬ  
いざや行かんと  
春のしらべを  
鳥も古巢に  
いそぐ行手の

東 くめ子

みどりもえ  
こぼりとく、  
花は咲き、  
鳥うたふ、  
わが氣息よ、  
わがきぬよ、  
世の人々の、  
いひはやしつゝ、  
夏ちかし、  
誘へば、  
歌ひをへ、  
かへるなり、  
花はみな、

あはたゞしげに  
をしむも理  
春よくと  
散りそめぬ、  
世の人々の、  
いひはやしつゝ、

春の夜

つねを

あかき梅咲く  
軒端しづかに  
いろりの中に  
目もと優さしき  
今年もらひし  
こゑも交じりて  
心もあかぬ  
よそに見るめも  
山かげの  
はるの夜の  
輪をかきて  
ちいばいと  
花よめの  
何にとなく  
物がたり  
あたゝかし

女

佐々木信綱

病いえていでゆを歸る少女子の

馬につけたり山百合のはな

村長のはなよめ君のさとがへり

荷馬ついできてはるの風吹く

夫やみて沖にいでがたしいつより

松魚つる舟はほきこのころ

春の歌の中に  
ろすゐ

今朝みれば庭の櫻もちりはて、

昨日にかはるあを山のと

春興  
秋影

樂しきは幼き子らを引きつれて

すみれつみにと野に出でし時

看護婦  
印東音鳴

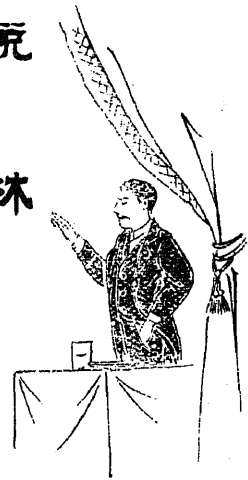
やみし人の只何よりうれしきは

みとりする人の情なりけり

説林

動物愛憐と教育

本多増次郎



今日、皆さんの前に出て、御話する事を得ます  
るは、私のまことに光榮とする所で御座ります、  
併しながら、私は皆さんに向つて御話をする様な、  
専門的の智識は御座りませんです、只だ一つ従  
來研究して居ります所が御座りますから、本日  
は夫に付いて御話を致して見たいと考へます。  
夫は即ち動物愛憐と教育といふことであります。



日本の社會に於きましては、誠に不合理な、不  
論理な矛盾なる點が、誠に多く存在して居ること  
は皆さんの御承知の事と存じます。たゞに學校と  
家庭とに於てのみならず、社會全体に於て、思想  
の連絡の存して居らない點が甚だ多い。之等は皆  
何れも吾々教育家の宜しく改革すべき所でありま  
す一例を舉げて見れば、決して在つてならぬ現象

例令ば大人にのみ許すべく、小兒には許すべからざる様な事が、日本の社會に於ては通例許されて居る、小兒が煙草を吸かす様な事は其一例である、其他小兒が大人の様なフロック、コートを着たり大人の様な羽織袴を着用したりする事なども宜しく大人と小兒との間に存在すべき區別であらうと思はれます。尙其他教育上の問題に於きましても随分此の様な事が多い。大人が芝居や、

宴會に子供を連れて行つて、夜更けまでも一所に居たり、夫からして食物と寢所などに於ても宜しく存在すべき區別がない様に思はれます。

夫から、之を大にしては、學校騒動、生徒がストライキをして學校を騒がせる様なこと、これなども決して、あつてはならぬことでありますが、この學校騒動といふことなどは、これは當時の政治社會の弊風が、學校に遷つた弊害かと思ひます。尙其他教育上に於きまして、思想の連絡かないことを申しますれば、例令ば家庭に在る間は、宗教だとか、神話であるとか、童話であるとか苟くも形以外、小兒の想像以外に亘る話は少しも子供に教へないで置いて、そして學校とか幼稚園とかへ行くと、俄に此様な話を聞かされることにならる。だからして小兒は、今迄少しも聞かされた事

のない話を先生から俄に聞かされて、果して先生  
 のいふ事が眞實であるか、どうかと疑ひ迷ふ様に  
 なります、家庭に在りては、極めて不規律であつ  
 たのが、學校に行つて俄に嚴格なる規律の下に服  
 すること、これ等も皆其例であります、夫からも  
 一つ間違つた考といふのは、多く學校は受動的で  
 あつて、社會は加動的だとの考があります、學校  
 は吾々の受くる所であつて、社會は吾々の進んで  
 働く所だと考へる。併し、學校は獨り受くる働の  
 場所ではない、社會と同じ様に矢張進んで働く所  
 でなければならぬ筈である。其他、愛國を間違て  
 外人排斥であるなどと考へることなども、同じく  
 思想の矛盾といはねばならぬ。我國に於きまして  
 は、随分法律規則などが設けられます、併し幾ら  
 法律規則が設けられるにした所が、之を受ける土

臺がない時は、駄目でせう、規則を守る事の出來  
 る人間が出來て居なければならぬ。則ち政府と人  
 民との間に連絡がなくてはならぬ。國際間に於て  
 も、互に權謀術數を用ゐて他を陥れんとするが如  
 きも、皆之れ存在すべからざる現象である。  
 人間の動物に對する關係も確に、其中の一であ  
 ります、動物を憐むことを教へずに於て、女子に  
 對する徳を教へようとするのは、これは實に思想  
 の聯絡が缺けて居るといはねばなりません。人間  
 よりも弱いもの、人間よりも遙に憐れなる動物に  
 對して愛憐の情のないものが、どうして男よりも  
 弱い女に對する徳が守れませうか、動物に對して  
 憐の心なくして、如何でか、人類を憐むことをな  
 す人がありませうか。

今、日本及世界に於て、所謂動物虐待と稱する

ものが果してどれ程存在して居ますか。學問の研究と稱する貴き名前の下に、何如に多くの可憐なる動物が、殘酷極まる待遇を受けて居ませうか、彼等は生きながら脊中を針で通されて居ます。或は生きながら、皮を剥がれて解剖せられます。其他小供が、罪もない蛙に石を投げ附けては樂しんで遊び、或は蜻蛉を糸に縛つて見たり虫の身體を半分に切つて、其半分に棒切れを挟し込んで弄んで居る。誰か之を殘虐ならずといひませうか、料理の仕方に於きましても随分苛いと思はせるのがありませう、料理人が生きたる鳥を倒さにして運んだり、夫から生きながら鳥の咽喉から血を出す様な料理の仕方がある相です。又釣をする人が蚯蚓を餌にして魚を釣るのも随分酷です。生きながらの体中に針を通して、久して之を水中で苦し

めるではありませんか、西洋では近來釣をするに一旦沸湯をかけて其餌を殺して置いて、夫から釣針に通す様な事をして、少しでも之に苦しみを與へない様にするです、夫から金魚などを瓶へ入れて、其不自由なのをも構はないで之を樂しむ様な事をします。近來は又射的會なといふものか、出來まして、山野に入つては、鳥獸を追ひ廻はして之を射て取る様な事も、大人間の樂しみになつて居ます、外國に在りましても、婦人の帽子の裝飾などに用ふる爲めに、種々な熱帶地方の動物が殺されることは、眞に數知れません。然し日本では、未だ此様なことは餘りありませんが。牛や馬などの家畜に於きましても随分虐待せられることがある。荷物を運搬する時に、どれ程車を引く馬が虐待せられて居るかは御存じでせう。日本に於いて

到底想像も附かん事ですが、西洋に於て、よく比邊に注意する人は、冬の寒い時など、馬に轡を解めるにも、之を温めてやる相です。馬の口は至極柔でして、非常に感じが鋭いのですから。夫で注意するので。私どもは床屋に行きまして、冬の寒い時に頭を、彼の冷たい器械で以て、ジャキ／＼と苛られます、これは實に心地の善くないものです。が、馬だといつても矢張同じだらうと存します。其他馬を御するに致しても、無暗に鞭を加へたり、無暗に手綱をシャクツたり勞れたる馬に乗り、瘡せたのも構はずに使役します、新しい厩に馬を入れる時でも、注意の足りない爲めに、光線の不足とか、寒さの爲めとかで、苦しませられることが。随分多からうと考へます。

一言で申しますと、自分の受くる苦痛を自ら訴

ふる事能はざるものに對して、吾々が同情を表することが甚だ少いのである。其位置に吾々の身を置いて考へる、思いやるといふ事のないのが、缺點です。これが社會人心に及ぼす所の弊害は如何これ實に吾々の考へるべき問題でありませぬか。一体同じく虐待といふ中にも二種に見ることか出来る。一は表面に顯はれて誰でも憐れと思ふものと、他の一は裏面に隠れて居つて一寸見えないものとである。動物の方から見ると、例令表面に顯はれて居るにしても其割合に苦しくないかも知れない。例令て見ますれば西班牙國の闘牛の様なもの、即ち牛が非常に怒りて互に傷つけ合つて闘ふ時の苦痛は、病氣で以て死ぬる時の苦痛に比ぶれば反つて其度が軽いかも知れない。同じ人間にして見ても、砲烟彈雨の間に戦つて血を流して死

ぬるのは、外觀は甚だ苦しい様であつても、反つて病氣で苦しんで死ぬ方がつらい事もある。第二種の裏面の方は、一寸見えないから、吾々の感じが少ない。醫者が研究の爲に生きた兔を捕へて之を解剖したり何かすること、之は見えない方の事ですから余り吾々は、ひどく感じない。何れにしても、苦しみの多少、見ゆると見えないとを問はず、動物虐待が吾人の道徳的感情に感ずることの多きは明かである。

(未完)



## 寄書

保育上の疑點に就て教を請ふ

横田 鏞

凡そ事物は學理實際相待ざる可らず徒に學理のみに馳せて實際に疎ければ坐上の水練に異ならず夫れ幼稚園にて授る所の事も近來は文字の讀み書き等は大學廢せられたるが如し其説を考ふるに幼兒に讀み書き等を授るは頭腦を痛め身体に害ありとするものゝ如し是の雜誌の中にも往々散見せしやに思へり成程六ヶ敷文字の讀み書きを授るは左もあるべし併しながら五六歳以上の幼兒にはかな字等の簡易なるものを授け自然に讀み書きの習慣



を養成するは無益の勞に非ずと考ふ且つ幼稚園にて授くる事は必ずしも何々を其日に覺へしむると限るに非ず其成と成ざるとは責る所に非ずして幼兒の任意にするものなれば唱歌を唱へ遊戯を爲すと一般なり扱て深遠なる學理や西洋の事實はいざ知らず東洋は自から東洋の氣風もあり其間多少の斟酌なかる可らず從來の經驗に徴すれば一体に幼兒は其智慧の發達に連れ兎角に物事を覺へんと欲する傾きありて譬へば二三歳の幼兒にても一度物の名稱等を實物に就き言聞しむれば自然に記憶し他日偶然其物に觸目する時は忽ち其名を呼び親をして記憶のよさに驚かしむることあり是等は一般に兒子を持てる親にして意を留めたる人は然るを知らるゝならん學者の子は學事に敏く商家の子は商事に賢きが如く何れの家庭にても讀み書きは最も

重きを置く所のものなれば自然に其習慣を受けて讀み書きを好むの傾あり在園者中にも已れの氏名等は既に書き得る者さへ見受ることあり是等の點より見れば年齢に依りては必ずしも文字の讀み書き等を排斥するの理を認ざるやに私考するなり且つ教育の話等も唯單に卑近なる一口噺の如きものゝみにては耳を傾げざるが如し亦唱歌に至りては自から徳性を涵養すべきものと思へば其辭の優美にして多少文句の上にも章をつくるの必要あり縱令一二幼兒に解し兼る文句ありとも之を幼兒に責め其意味の解説を求む可きものに非れば決して幼兒の苦痛を感じるの理由なし毎日一回二回と唱へしむる内に自然に意味の何の邊にあるやは悟り得るに至る可し唯解し易さ一邊のみにて無趣味殺風景に且つ荒蕩無稽なる事柄等は避くべきもの

と信するなり一体詩や歌にても其意味の露骨なるを善とするに非ず其意味の隠微なる所に神韻の悠遠なるありて以心傳心もて人を感し鬼神をも泣しむるに至るなり何と唯り唱歌に於て然らざらんや以上述來たる所の私見は其概略にして然も時流に逆ふの嫌ひありて恐くば大方諸氏の笑を招かんと幾度か躊躇せしも退て思ふに是れ斯道に忠なる所以に非すと且つ古言にも疑しきは問んことを思ふとあれは聊か是の疑點を擧て大方の教を請ふ

備後の毬歌

備後 佐藤 龜 一

●べにやのおかざの。うめものは。むつてもむつても。ようそまる。とんぼにみづひき。みづくる

ま。みづがないとておえとまで。おえとながさき。こしかけて。こどもつさんこどもつさん、こゝはなんちうところかへ。こゝはしなのゝ。せんこうじ。うめとさくらをわけまして。うめはすいすい。もとされて。さくらはさいさい。ほめられた。

●あんなこともしうと。こんなこともしうと。いせへまいるいふて。いせのこみぞで。いかをひろうて。やいてかながらかふて。たなべふちやけて。ねこがとてくて。ねこをばふいふて。あちのはしらで。あたまこつこつ。なわまいだ、なわまいだ。

我が地方の毬歌

相模 平 岩 繁 治

五つ六に、七八九十や、十二三十四の、れてまんさむろく、おかしはしろかね、きよーろくる

くまで、七十一二三四、八十一二三四、九十つ  
 たらほうしゆや、ほまめや、ほうしゆや、かぐら  
 や、ちいとおんまるめで、これで一かんよせ、お  
 てさんむろく、おかしわしろかね、……(とまへの  
 如くつづきちよいとおんまるめでこれで二かんよ  
 せ三かんよせとついくのであります)

同

同

うけ——とつた、うけ——とつた、これから、ど  
 なたにおさ——しもうす、むこうえめいやる、お  
 こうしづくしの、しろかべづくしの、あかいのれ  
 ん、をさぞへか、つた、しとやのなひのに、たれ  
 におわたしもうす——ぞ、それからおひとがない  
 とて、あざのあざづき、てうちんにてうで、たい  
 まつ三ぼんで、やらかした、く、またあとさぬ  
 よーにうけとらしよ、く



端午の話

せく生

年中行事の中、古來最面白く又最盛に行は  
 れつゝあるものを選出して、これまで語り來つた  
 例によりまして、今度の語草には、五節句の一で  
 ある端午を話す事に定めたのであります。扱この  
 五月五日は端午といふが、彼の重陽を名つける  
 九月九日の節句を重九といふと同じ様に、亦重五  
 とも申すのであります。この端午の節句には、菖  
 蒲草を大切な節物としまして、家々の檐端はこの



草と艾とで葺き飾られるのみでなく、昔は頭の飾にした菖蒲鬘や頭の臺にして寝る菖蒲枕、沐みをする菖蒲湯にも又愛でたく飲まうとする菖蒲酒等にも用ゐられました。それ故に又菖蒲節句ともいふのであります。そのみならずこの日を祝ひます爲に近世は盛に旗幟甲冑人形等を樹てる様になり、之にそへて粽かしは餅等を製りまして、親戚やら懇意の人達やらの間に遣り取りをしまして、俗間では之を男子の節句といひ習して居るのてあります。

第一 端午の名の意義

五月五日を何故端午と名けたらうかといへば、思ふにこの端の字は「ハジメ」で午の字は「ウマ」の日であるから、昔端午といふ日は強ちこの五日に限らないで、何でも五月の初の午の日であつた

に相違なからう。然るに其の午は五と同音である所から、又偶然に五日に當つた事などがある所からして、何時しか端午が事實上の端五即重五に定まつたとは、丁度彼の節句が最初三月の上の巳の日であつたのに後世は己の日であらうがなからうが、其れに係らずして、三日といふ雛節句に變つたのと全然同様だと思はれます。

第二 菖蒲と艾

(一) 菖蒲鬘 天皇を初め奉り朝廷の人々以下一般に此の飾り物を附けました事は、天平十九年五月聖武天皇の詔に「昔は五月の節句には常に菖蒲を以て鬘とせ壁にあらざる者は宮中に入るゝとなく」（今も此の宮中に入るゝとなく）とあり、尙之より四五十年前に山前王や大友家持の咏まれた歌などを視ますと菖蒲ばかりでなく、艾をもそへて鬘にしたとが知られます。鬘の様は時々によつて此の後も色々

に變つた事は、丁度今日婦人方の簪等が一定して居らぬと同じ事であります。

(二) 屋根 スツト昔の正史の類には、此の事が見えて居りませんが、源高明の西宮記に「五月四日、夜主殿寮内裏殿舎葺三草蒲」とあり、又枕草子には「草蒲艾などの香り合ひたるもいみじうかかし九重の内を始めて言ひ知らぬ民の住家までいかで我がもとにしげくふかんと葺きわたしたる」とありますから矢張中古時代から、この草々で屋根をふきました風が上下一般に行はれたといふ事實が知れます。

斯様に此等の草が當時珍重されました故は無論確には言ひされぬ事ですが、思ふにこの期節は葛蒲も艾も最よい香氣のある時で、悪疫邪氣を拂ふには此の上もない藥草であると信せられたらう

といふも、強ち生一人の臆測でありませぬ、彼の本草家の書物には皆其の機能が記してあるのです。

(三) わやめの枕とわやめの蒔 今日では餘程昔好きの御方でなければせぬものでせうが「都人引きな盡しそわやめ草かり寐の床の枕ばかりは」(雅類)「立花にあやめの枕香ふ夜は昔を恣ぶ限りなりけり」(俊)などの歌は鎌倉時代のでありますが、尙下つて足利時代の書物や記録にはこれに似た事が澤山あります。「凡五月五日あやめ草をもて屋の軒に葺き、或は時の邪氣を避け拂はん爲に用ゐらるゝなり。又同日あやめの蒔を用ゐらるゝこと三百年前よりあり五月四日の夜草蒲の御庭枕をりて敷せられて御しづまり候」

と殿中御對面記にありです。この他續命縷即藥玉に草蒲を附けます事や、葛蒲蓬をつみて内裏に上るといふ草蒲の興の事、そ

れに又菖蒲の根を細かにきりて酒に漬けて服する  
七蒲酒の事や、四肢屈伸の不自由なるもの小兒の  
弱さものが功能あるといふ菖蒲湯の事などについ  
ても、一應語るべき次第ですが、餘り面白くない  
事故省かします。

(四)「ちまき」

「ちまき」の意義は何うであらうか。(一)我が國上  
古の風俗で貴び用ゐた武器の一つに「茅纒の稍」  
といふものがありまして、幾重もまく即干巻の意  
味の名で端午の「ちまき」は其の形によく似通つ  
て居る故に、矢張千巻といふので、菰でも茅でも  
笹でも、皆「ちまき」と云のだらう(二)最  
初は凡て茅でまいたから「茅まき」といふので其  
他の物を用ゐるのは皆後世の事であるといふ二  
説あります第一の方が當つて居りませう。扱

れには其の形、其の材料によりまして菰粽、菱粽、蘆  
粽、笹粽、餠粽などの名があります。

粽は我が國では陰陽包裹してまだ分散せぬ形に  
形どつたといひ、支那では泊羅に投じた屈原への  
供物から始まつたとか、高辛氏の惡兒難船して水  
神となり粽を得れば波濤を立てずなといふ事から  
始つたといふ事は皆信せられぬ附會説でありまし  
て、生は矢張我が國上古の風が草木の葉を食器に  
用ゐた事が笹粽、茅粽となり、又彼の相餅など、  
もなつたのだらうと思ひます。

(五)菖蒲胃と胃人形

鎌倉時代より足利時代にかけては、端午の玩物  
に菖蒲胃といふ者を作つて其の形も色々ありまし  
た。石戦の折などには之を冠りなどして騒いだ様  
であります。益軒先生の日本歳事記の端午の菖蒲

胃 太方の事をいへる所に「此の事昔は厚き紙に人形を拵へ或は蒺の葉にして馬を作り或は木を長刀の如くにけづりなどして戸外に立て侍りしが近年は風俗美巧を好みて木を以て人馬の形を刻み、又張子にして彩色を施し或は甲冑をきせ劍戟を持たせ、戦鬪の勢をなましめて戸外に立て侍る是を靑人形といふ」

とありませすが之は徳川四代將軍家綱公の貞享年間（これとくがはしだしやうぐんじつなうていきやうねんか）の事で、其の次の元祿時代には一層これ等の事が盛りになりました。

(六) 幟と鯉

軍人軍馬に大小の旗等を交ぜまして戸外に立てます事は、尙武時代にはこの菅蒲節句に最似合ひたる儀式でありませう。夫故彼の五月幟として、色々（それゆえかれ）の繪をかきたる幟を立て並べる事は徳川時代の初より中々盛なものであつたと見えまして三代將軍家光公の正保慶安の町觸にも「前々より小旗の義網布一圓仕るましく候」。又四代家綱將軍の萬治二年四月十六日「毎年申觸れ候如く五月節句の甲結

拵に仕るましく云々」など干渉がましか法令が出ました。正村の句にも五月幟をよんで「門や又立ち榮ゆべき紙のぼり」などあります。之は寛永頃（これかんえいご）の事ですが、追々布幟が流行して參りつて、張良辨慶、義經、武内宿禰などの繪は最も多く畫かれました。して見ればこの幟などは少くとも出生男子の武運を祈り長壽に肖からしめたものだらうと思はれます。

鯉を幟と同様に立て並べる事は戦争の時の吹流しを押立て、我が勢力を張ると同じ意味でありませうか、其の何故に鯉を之に用ゐるかといふ理由は思ふに支那で黄河の龍門を登つた鯉が龍になれるといふ故事がある爲に鯉を出世魚などと申すはかりでなく又粗（またまないたのうへ）上に載せられた鯉が死に臨んで從容迫らぬといふ大悟した武士の氣風を具へるので

武士道を貴ぶ封建時代には中々重ぜられたものでしたから、行々武士に出世し名将とならん望ある男子の出生には節句の祝として鯉の吹流はなくて叶はぬものとなつたのでありませう。

(七)端午の遊戯

此の日に印地打のあります事は南北朝時代の洞院公賢卿の園大曆に「五月五日天陰或雨今日賀茂社競馬神事如レ例。彼是云、今年天魔流行匪直世事、云々童等結ニ構菖蒲甲ヲ即學ニ合戦ニ所々催ニ其興ニ童部ノ親類以下成人武士等相交、刃傷殺害ノ所々及テ數輩ニ云々誠ニ不可レ説事歎」とあります。夫から下りまして「けふさすは印地のしやうぶ刀かな」と寛永發句帳にありませう。抑此の頃に幟を立てたり彩色した紙又は布で巻いた木刀をば菖蒲刀と名づけ之を抜き連れて戦ひの眞似して遊ぶを菖蒲

切といひましたが是は全く石戦の遺意でありませう。又之に似て菖蒲叩といひますのは子供等が菖蒲の葉を繩に縛ひまして之で地を叩いて遊ぶのです。地方によりては之を旅人を苦しめ婦女子等を泣かせる程やつたさうであります。

結婚論 (承前)

野本生譯

斯くいへばとて、予は敢て、我國富豪の家庭を悉く非なりといふのではない。予が知人の中には富裕多福なるに拘はらず、其の家庭の空氣は、常に、清淨和順にして、世の善良なる男女子たるに必須なる要素を表示し、其の模範となるべきものがいくらもある。予は、又彼の門閥家が、眞面目に、自己祖先の美を誇るに對しては、豪も、批難

すべき點を見出さざない、のみならず、却て、予は之れを稱揚する。予は、我が米國に於ても門閥、舊家の誇るべきもの多からば、其の多き丈け、更らに妙なりしならんと思ふのである、家系門閥は青年諸士に對して、偉大なる感化力を興ふるもので、人若し名門舊家の出ならんには、其の家名に耻ぢざらんとするは勿論、更に、進んで、之れを發輝せんが爲めに、感奮努力するやうになる。此の故に貴き家名は、其の青年者に取りて、自己体面の保護上、最も強固なる橋壁となるものである。家系は決して、輕忽に付すべきものではない、吾人は、須らく、各自、其の祖先の美を稱揚し、又大に、之れを誇るべしである。然れど、慢心、他を輕んじ、或は、自己祖先の比較輕重を爲し、妄りに、他の家名を中傷するが如きは元より不可で

ある。是れ、其の精神の陋劣なるを自白するものにして、苟も、亞米利加人としてなすべき所業でない。又、人、若し、幸に多少の財貨を有したればとて之れが爲め、其の財貨を有することの已れより少き他の人々の善を拒否することは出来ない筈である、予は、富家の子弟が如何に優さしく養育せられたるか、其の心意道德が、如何様なる注意と保護の下に發達したるか、又其の子弟の心中は如何なる希望目的をもて圍繞せられて居るか、此等の事を詮索するのではない。唯だ、其の子弟の有せる眞價値に對して、質素にして、富裕ならざる良家の女子を配偶せしめんと努むるのである。然れど、「併し、彼の女の身分はどうである？」是れ一般、世の高慢なる母親の先づ第一に問ふところである。身分？、何をか身分といふ？、其の女

子にして、優さしく、愛すべく、且つ、又、眞實ならんには、何ぞ、身分の高下を問はん。其の女子の價值性格は、虚偽なる標準の能く計り得べきものならんや。身分てふ社會上の地位は、道義的精神の高尙なるに比すべきものであらうか。女子とし妻としての善良なる性格に比ぶべきものであらうか。又、母としての眞義責任の至極に通曉せる彼の女の正しき思想に對比し得べきものであらうか。彼女は、馬車を驅る富家の子女に比して、其の女としての本分に缺くるところあるか。彼れは、善良な妻女となるに、富家の女子に比して劣れる所あるか。抑も、世人は、何の爲めに結婚をなすか、世俗の意向に適せんが爲か。將、又、虚偽、斯の如き世俗の標準を守らんが爲なるか。虚榮心は、常に、我等の家庭に、憂苦を伴ひ來るの

外、更らに、此の世界に對して、數多の障礙を爲したり。我が青年諸士は、其の周邊の附帶物によりて女子を評定するの愚をなさず、須らく、單に女子其物によりて、女子其物を判定するの度量を有せねばならぬ。眞價は能く久しきに堪へ、其の全く、損滅するに至りて始めて止む。女子の愛情は女子が男子に齎し得るところの、すべての富、凡べての技術、藝能に優ること萬々である。一年三百六十五日、絶えず、男子の周邊に來往するところのものは、實に此の愛情である。金は多くとも、心懸次第にて、世は渡れる。併し、愛情は多くなくて叶はぬ。愛情の多きは如何に多くとも其の多さに過ぐるといふことは決してないのである。

又、之と反對に、女子が、男子の收入財産にの

み、重きを置く場合にも亦此道理は同じく眞理である。青年者の眞價を判定するに、唯だ、其の求婚當時の地位境遇によりて、其の標準を定むる事は、頗る、殘酷な仕方といはなければならぬ。予は元より、「貧苦の戀愛」を懲憑するのではない。然れど、若し夫婦が始め相應なる収入をもて世に出で、後、相携へて、漸次、富貴榮達の域に進むといふ昔時の説論は甚だよいと信ずるのである。最も、是れは、往々、小説、物語の中に見るやうな餘りに都合よき妄想らしいが、此の中には多少眞理の掬すべきものがあることは事實である。女子、若し、嫁して安全ならんを欲せば、徒らに、豪奢の生活に慣れて、其の働き勤むるや、是れによりて、人生の志望目的を達せんが爲に非らずして、一時偶然の發作に止まり、常に遊惰安逸を好

める富家の男子に行かんより、寧ろ、中産の家に生れて、正直勤勉熱誠ある。男子を撰ぶべきなり是れ、予が、深く信じ、固く主張するところである。世の男子にして、體軀健全、強固なる主義識見を有し、常に聖帝を信じ、克己節制、勤勞を恐れず、心に、常に、必然の成功を期し、能く、世路の難險に勇進するの概あらば、予は、決して、其の貧しさを厭はない。否、斯かる男子こそ、米國家庭に養育せられたる女子の正に信頼するに足べきものである

(不完)

寡婦と愛子

(アーキング)

(ついで)

一 一一 三 譯

此慈母の苦痛と愛情を何處迄も傷めやうとする



のか、それ／＼冷淡な指圖があつて鐵の刃が、砂や石に當る音もした。實に吾愛せる者の墓に此物音を聞く程、氣も魂も滅入る次第である。此騒がしき物音に果敢ない沈思から醒されて、老母は涙に満ちた眼を上げて、恍惚と力なく四周を見ました、今や人々は棺を墓穴の中に下さうと、綱を持つて近付きました時に、老母は我と我が手を握りしめ、ワット悲歎の涙に暮れました側らに介抱して居た一人の女が、老母の手を取り抱き上げて、「まあ／＼其やうに御心痛なさるな、」と慰め言葉を言つたけれど老母は頭を振り手をしめて、少しも慰められぬやうでした。

人々が、遺骸を地面の下即ち墓に下した時に、繩のきしめく音を聞いて老母の心は何うでしたらふ、何うしたはづみか、棺桶が何かに衝き當つた

やうな音がしたから老母は優しい心から愕いて、いと聲を出した、畢竟老母は、吾兒が人間界の苦痛の外にあるとは思はず、矢張り苦痛が起つたのかと思ふたからでありました。

私は是に到て、見るに忍びませんでした、私の胸は迫り、私の眼は涙で一杯になりました、私は別に用のないのに、慈母の悲歎の有様を見て居るのは、何か氣が咎めるやうに覺えましたから、墓場の別な所へ行つて、會葬者が散ずるのを待つて居りました。

私は、老母が此世に唯一人可愛がつて居つた、獨り息子の遺骸を墓場に見捨て、悲しげに、又苦しげに、やつと墓を出て、そして、淋しい己が佗住居に歸つて行く後姿を見まして、其心の中を察しますると、私の胸も張り裂くるやうに、

悲しく思いました、私は次の事を思ひ續けました、  
 全体富人の悲哀と言ふのは如何なる者であらう  
 か、富人等は慰める友もあり、憂を忘れる娛樂も  
 あり。又悲哀を散じたり、外に移したりする事の  
 出来る世ではないか、又年少者の悲哀とは、如何  
 なる者であるか、その發育して行く心は、すぐ疵  
 を愈し、又其彈力即ち抵抗力に富める精神は、壓  
 迫を排して高まり、其活潑な移り易い愛精はすぐ  
 新しい物に纏ふものである、けれども、貧民の悲  
 哀は、外から慰むべき方法はないのである、まし  
 て、老年の悲哀と言ふものは、要するに、冬枯れ  
 の日のやうな浮世佗びしく、再び歡樂を求むると  
 言ふ事は能はぬのである、殊に寡婦の悲哀、即ち  
 老年で、獨り身で、貧亡で、この世に唯一人の子  
 の墓に涙を潑ぐ、この老寡婦、あはれ晩年の杖と

も頼むべし最愛の子に先立たれて、あゝ氣の毒と  
 思ふにつけ、私はこれこそ到底慰めても無益だと  
 言ふ事を感じたのでありました。

私は尙暫らく、墓場に立止つて居りました、そ  
 れから、程なく家路に向ひました時、路で一人の  
 婦人に逢ひました、その婦人は先程老母を荐りに  
 介抱しながら、慰めて居た女でありました、聞け  
 ば老母を佗住居に送り届けて、今歸り路だとの事  
 でした、私は此婦人から、今迄私が見た、哀れな  
 光景に關係した詳しい話を知る事が出来ました。  
 そも、此死者の親は、固と幼少の時から、此村  
 に住んで居りました。小ざつぱりとした家に住ん  
 で、農業に従事し、畑に手を入れたりして、人に  
 悪く言はれず、愉快に過ちのない月日を送つて居  
 りました、夫婦の中に一人の子息がありました、

生長するに従つて、親々の杖ともなり、亦自慢話の種ともなりました。「ほんとに好い息子さんでした」と、件の婦人は言つて、尙語を續けて「誠にあの息子は、善い若者でした、氣質の穩やかな、近所の人にも親切にして、よく親に仕へました、日曜日には晴着を着て、ずらりと丈高く恰好よく、笑顔をしながら、寺に母親を途つて行く様を見る」と、人の邪しな念慮も拂はれるやうに見えました、又母も自分の話し仲間の誘ひより、獨り息子の「ジョージ」の腕に凭れて行くのが、何よりの好物でありました、それもその譯で、この界限には、あの子より美しいのは、一人も居りませんでしたから。」

不幸にも、此若者は、或年景氣が悪く、農作の外れた年の事でありましたが、近隣の川を往復

する運送船に雇はれる、身となりましたが、程なく海軍の募集隊に捕へられて、海に連れられて、無理遣に水夫の中に加へられました、此報知は兩親の許に來ましたけれどその外の事は少しも知りませんでしたが、が、とにかく是か兩親の身にとりましては、誠に大黒柱を失つたやうな者でした、故に、父親はとかく氣分の勝れなかつたのが、是から元氣なく益々涙脆くなつて、終に墓場の土となりました、老母は獨り世に取り殘されましたが、老衰の身の、とても生活を立つると言ふ譯にも参りませんから、公に補助を仰ぐ事となりました、けれども、村の人は何かと温き精を寄せ、此村の古老の一人として尊敬しました、是迄住んで居ました家は、誰も外に求むる人もありませんから其儘住んで居りましたが、前日の幸福な有様とは引

換へて、實に淋しく三度の食事は庭から取れる少許な者で、濟ましたが、之は近所の人か時々來て、耕して呉れるのであります。

今から二三日前の事でした、老母は食物の用意をしやふと庭に出で、野菜を集めて居りました時に、不意と庭に向いた戸が開いた音を聞きまして、と見れば、見馴れぬ一人の男が來て、暮りに熱心にそこら見廻して居りました、身に水兵の服を着て顔の色は蒼白う瘦せ衰へて、病苦と困難とで、身軀が摧かれたやうに弱り果て、居た男でした、此男が老母を見ますと、急いで走り寄りました、けれども、其歩き方は誠に力の無い、足元かひよろしくとして、老母の前に倒れて小兒のやうに涙に咽びました、老母は氣の抜けた顔に、屹驚したやうな眼で、此男を見ました、此男は堪へ兼

たと見えてかう、言つて叫んだ。

「お、母上よ、お前はお前の子を知らぬのか、私

お前の子の「シヨージ」である、

と言つたので、母はよく見ますと、嘗ては立派であつた、吾子の成れの果でありました、病氣と他郷の空の禁錮で、受けた負傷の爲に、見る影もなく瘦れて、せめて、自分が幼時の光景を過した、故郷の土に眠らうと思つて、惱んだ足を引ずり、這々來たのであります (未完)

衛生上の注意

墨 水 生

世に氣の毒なる者まことに多し。中にも遠大の雄志を抱きつゝ、不慮の非命に其の身を失ふ者の如きは其の尤甚しき者たり。さて斯る際までに

に至らずして所謂「残念なりき」、「遺憾なりき」等  
いふ程の氣の毒加減なる中には、斯くならぬ以前  
に注意し豫防して、其の不幸を免れ得べき事少な  
からず。今其の例の一として諸君を紹介し、又自  
の戒ともなりたきは衛生上の一實話なり。

予の友に某君といふ醫學生あり。國は三州岡崎  
在にて、夙に中學を卒業し高等學校に進みて遠く  
加賀の金澤に在學せしも、一昨年以來病の爲に休  
學し療養をさく怠りなし。

君は既に醫學に心得あることゝて屢々余に語て  
曰く、初め僕は金澤に行きしより別段に苦痛を覺  
えずして只何となく次第々々に疲倦を感じたる  
共に少しく全體に膨みを來たし心臓の鼓動さへ稍  
異狀なりしに氣付きたれば、學校の醫師に診察を  
乞ひしに、脚氣なるべければ轉地こそよけれと勸

められたれとも、生來頑健の性なりしと、修學の  
後るゝを嫌ひしとにて、苦みを忍び呻き吟きて服  
藥しつゝ漸く一年の試験を経過したれば兎も角も  
出京して、其の専門醫の治療を乞はんとて眞に○  
○博士に診察せられしが、矢張脚氣なりとて歸國  
の宜しからんを教へられしまゝ、其の如くせること  
一夏一冬なるも聊の効驗なきのみか體は益々膨れ  
來りて眼は塞がらん許なるに打驚き最早打捨て置  
かれもせず、土地の病院に行きしに、今度は先づ  
尿を檢(ざりき)べしに尿中に蛋白の多きを發見し  
直に腎臟病なりと判定せられたれば、今までの手  
當は害ありたればとて何の益もなかりけりと一度  
は驚き一度は喜び直に入院して安靜療養(体ヲ助サ)  
を施し日々牛乳を六合つゝ用ゐしも空腹堪へがた  
ければ終に八九合より一升を用ゐて殆半年を過ぎ

たりしも蛋白の排出量は更に減せざりき。

憂悶の極退院して又出京し〇〇堂に入院し〇〇

博士の治療を受けしと三ヶ月許なりしも是亦はか

くしき効能無なきより最早殆と絶望せんとせし  
も。

本年に至りて或る人の勸によりて腎臟病糠尿病

専門家たる〇醫學士に行きしに正しく慢性の腎臟

炎なるにて該病を第一期(發病して蛋白)第二期(身体膨

内の組織變を第一期(腎の機質全く變して取

りたる頃)第三期(縮し尿排出せられ難)と分ちたる第

二期に進みたるにて猶全癒の望あれども療法を誤

まれば第三期に陥るなりとのをに驚かざるを得ず

して直に家を其の醫師の側に借り、母を國より招

き來して今まで殆ど三ヶ月療養せり。

専門醫の甲斐ありて膨は全く去りて排出蛋白亦  
著しく減少したれば此の分にては再び學校に歸る

とも出來べけれど生涯酒類香料を禁せられ、激烈  
の運動又烈しき熱病等して再發せしめざるべき注  
意は中々容易の事ならじ。

藥は水藥二種散藥二種丸藥一種にて二日分づ、

代價貳圓〇五錢つゝ(亦し之に飯尿料)にて即一日分

壹圓貳錢五厘に當り、牛乳は少くも五合を下らず

肉は柔き鳥肉魚肉(赤色の)にて、運動を忌む爲め車

にも乗らず草履にて徐々に通ひ居れりと。

前途多望の氏が醫學が修めんとして自ら此の難

に罹る。幸にして、家計豊かなる氏なればこそ、日

々悠々として全快を待つを得べけれども貧しき者

のいかで如此なるを得べき。終に不治の悲に陥る

外なかるべし。氏尙曰く此の病は實に難病にて其

の治し難き点と餘り苦を感ぜずして衰弱するとは

肺病と兄弟分なるべければ世の虛弱者として顔色わ

ろく然も肥え太りて倦怠疲勞を感ずる如き人は早く注意して其の尿を検査すべきなり、且婦人小兒の虛弱性の者は冬季は寒冷に當るを防がんが爲に腰部腹部に厚き毛布を巻きて此の病の發生を防ぐべく殊に平生運動不十分にして美味のみ用ゐ安逸に耽る上等社會の婦人方には此の病の割合に多き由なればかへすくも各自々豫防策の肝要ならんと語り續けられたるまゝ、已れ一人聽き置くも惜しければとかくなん。

“Fröhliche und Mäszigkeit sind die besten Arzte.”

嬉樂と適度とは最良の醫師なり



雲の上

●東宮の東北御巡遊 皇太子殿下には來る五六

月の交を以て御見學旁々群馬、長野、新潟、青森宮城の各縣下へ御巡遊あらせらるゝやにて目下大迫侍従、錦小路御用掛等以下數名は同地方へ出張檢分中の由なれば其歸京の上行啓期日も御決定相成る可き筈なりと承はる。

●東宮妃殿下の御着帶 皇太子妃殿下には昨年

九月御妊娠あり同十一月内々御着帶の御儀あらせられしが其後日増に御健勝に渡らせ玉ひ先月十五日午前九時、青山東宮御所にて御吉例の御着帶

巢

報



式を行はせられたる由にて、當日は前例に據らせられ、御近親鷹司公夫妻より御帶を進め奉り、參賀の人々に御祝酒を賜りたりと承る。

● 通宮の乳母車 通宮殿下には最早や乳母車の御乗用差支なき迄に御成長あらせられしに付、先月十日を以て調度局より、特製の乳母車一輛を御送致に相成りし由承はる。

● 常宮繪畫御師範 常宮、周宮兩内親王殿下には女流の畫家野口小蘋(親)氏を召させらるゝ事となりたる由にて、同女史には先月を以て常宮御用掛を仰せ付けられたりといふ。女史の名譽此上なき事といふべし。

● 小松宮殿下の御出發 英皇戴冠式に我が天皇陛下の御名代として、御臨席せらるべき同宮殿下には、隨行員一同と共に、愈先月十九日午前

八時三十分新橋發列車にて御渡英の途に就かせられしを以て、各皇族方を始め各大臣、樞密顧問官、海陸軍將校、各省高等官一千餘名は、同停車場に奉送したり。而して殿下には正午横濱解纜の獨逸郵船アルベルト號に搭せられ波濤萬里の長程に上り玉ひぬ。因に記す、同郵船は北獨逸ロイド會社の新造船にして總噸數一萬千六百噸登簿噸數六千五百八十九噸、又隨員は左の十三氏なりと

- 式部長子爵 三宮 義胤 宮中顧問官侯爵 中山 孝磨
- 調度局長 長崎 省吾 式部官 丹羽龍之助
- 待從武官海軍大佐 井上 良智 陸軍砲兵中佐 柴 五郎
- 元帥副官陸軍歩兵中佐 黒澤 源三郎 御附武官陸軍歩兵少佐 平君 弘太郎
- 大學教授醫學博士 土肥 慶藏 陸軍歩兵少尉 西郷 從德
- 膳部長 大谷 木長通 式部副官 高橋 勇治
- 宮家從 阪井 孝

● 學事集會

● 女子高等師範學校

に於ては 先月八日に、



本科生徒の入學式あり同廿八日には地理歴史、及び家事專修科生徒の入學式ありし由▲教授安井君子氏は今回舎監を免ぜられて教授専任となりたりと▲ヒュース嬢は本月より九月まで一學期間四年生の教育講義を囑托せられしとのこと▲本月二十八日地久節の佳辰に於ては例年の通り如蘭會總會を開くべしといふ▲本年卒業式に於ける菊地文部大臣演說中の一節は以て同大臣女子教育の方針の存する所を見るべきか、曰く

女子教育の事は其學校に於ると家庭に於けるとを問はず女子の職分として最適當なるものにて寧ろ女子の天職とも稱す可きものなり抑も女子と男子とは固より尊卑の別あることなしと雖も各其本分ありて互に相補ふものなり女子が男子と同様に社會競争の渦中に立て同一の職業を執るは社會の

或る情勢に於ては避くべからざるをあるべしと雖此の如きは國家の爲慶すべきとにわらず幸に吾邦に於ては未だ此の如き必要を見ず故に我邦の女子教育は女子として世に立つに必要なる體育と徳育と知育とを授くるを以て足れりとすべし所謂「リベラルカルチエアー」即寛容なる練磨に止まり女子に適する技藝教育の外は専門の教育に入るとを要せず要するに女子教育は女子をして家庭の主婦となり良妻賢母として其本分を完からしむるの準備を爲すにあり

▲本年卒業生の人名は左の如し

文科

- |        |    |    |       |    |    |
|--------|----|----|-------|----|----|
| 鹿兒島縣士族 | 池袋 | 森賀 | 香川縣士族 | 林  | 節  |
| 大阪府士族  | 岡田 | 折枝 | 熊本縣平民 | 大石 | つる |
| 宮城縣士族  | 大津 | 滿  | 福井縣士族 | 加藤 | 羅  |
| 北海道士族  | 鎌田 | キク | 愛知縣平民 | 館  | つれ |
| 熊本縣平民  | 田島 | マス | 石川縣士族 | 榎尾 | 薰  |

香川縣士族	國越	八重	京都府平民	窪田	八重
慶手縣士族	工藤	しげ	香川縣平民	山川	郁
京都府平民	松宮	寛	宮城縣士族	小々高	操
東京府士族副小島	タツ	大 阪 府 平 民	江 川	さめ	
長野縣平民	手塚	トツ	香川縣士族	寺島	トク
長野縣平民	篠原	みやの	鳥取縣平民	森岡	タケ
福島縣士族	鈴木	ゆき			
富山縣士族	生田	スハ	大 阪 府 平 民	奥山	春
福岡縣士族	渡邊	鶴	秋田縣士族	川井	タマ
秋田縣士族	川井	直	熊本縣平民	甲田	つぎ
山梨縣平民	瀧澤	ミチ	和歌山縣士族	中尾	幾重
山口縣士族	中井	茂	福島縣士族	中條	ひろ
香川縣平民	保井	コノ	富山縣士族	寺本	登美子
茨城縣平民	佐野	せい	宮城縣平民	菊池	教世
山梨縣平民	志村	達	山梨縣平民	下瀬	龍乃
石川縣士族	廣瀬	他美			

地理歴史專修科

東京府平民	高原	トミ	新潟縣士族	伊藤	たま
宮城縣士族	伊藤	チカ	北海道平民	波佐谷	三枝
新潟縣平民	五十嵐	せい	宮城縣士族	朴澤	しげ
東京府平民	西本	ユキノ			

理科

東京府平民 高原 トミ

理科

東京府平民	高原	トミ	新潟縣士族	伊藤	たま
宮城縣士族	伊藤	チカ	北海道平民	波佐谷	三枝
新潟縣平民	五十嵐	せい	宮城縣士族	朴澤	しげ
東京府平民	西本	ユキノ			

東京府平民 東條 ハル  
 山梨縣士族 加島 さと  
 茨城縣平民 高橋 さみ  
 大分縣士族 田北 ヨネ  
 山形縣平民 土屋 いと  
 山口縣平民 中井 あや  
 大阪府平民 村瀬 ミチ  
 廣島縣平民 山田 トシ  
 香川縣平民 赤木 タネ  
 石川縣平民 荒木 津ね  
 廣島縣平民 澤田 ミサオ  
 長崎縣士族 清河 テル  
 新潟縣士族 三宅 ます  
 静岡縣平民 須田 かこ

●東京音樂學校生徒募集  
 ●東京音樂學校にては  
 今年甲種師範科官費生三十名を募集せり。入學志願者は願書に履歷書及戶籍謄本を添へて本月二十日までに願出づべしとなり入學規定は左の如し。

▲師範學校中學校高等女學校(四ヶ年)の卒業の者に試問、唱歌、國語若くは英語、體格を試験し其他のものに更に國語(讀書作

▲男女を問はず品行方正年齢十七年以上。  
 ▲師範學校中學校高等女學校(四ヶ年)の卒業の者に試問、唱歌、國語若くは英語、體格を試験し其他のものに更に國語(讀書作

文) 數學地理歴史をも試験す。

▲甲種師範科生徒は授業料を免除し圖書樂器を貸付し學費として一ヶ月六圓乃至八圓を給す。

▲入學試験は五月五日より始む。

▲詳細を知られたる方は四月八日の官報廣告を見るべし

因に記す、甲種師範科は卒業の後、師範、中學

高等女學校の音樂科教師となるものなり。

●英米公使の女子大學參觀 英國公使マクドナルド、米公使バックの兩氏は何れも夫人同伴にて、

先月十四日午後一時より小石川女子大學校を參觀

したり、同校にては委員長大隈伯を始め委員、濫

澤榮一、蜂須賀、西園寺の兩侯爵三井三郎助、嘉

納治五郎の諸氏も參校し、公使等は成瀬校長の案

内にて英語教授法、及日本禮法其他二三の体操を

見、寄宿舎を參觀し、夫より講堂に於て米公使は

先づ近時日本女子教育の進歩せるを賞賛し、歐米

に於ける女子教育の發達に就て一場の演説を爲し

終りて同校家政學部生徒の庖丁に成れる料理の饗應を受けたるといふ。

●大日本婦人教育會 先月廿六日午後一時より

鍋島侯爵邸に開會雨天の爲め園遊會の催しなかり

しも來會者無慮二百餘名會頭毛利公母堂副會頭鍋

島侯爵夫人の摺埃及び毛利男爵の會計報告ありて

後數番の能狂言を催し一同に茶菓を呈し撮影して

會を終れりといふ。

●國語調査會委員任命 先月十一日左の任命あり

上田氏はそが主事を命ぜられたり。

國語調査會委員長被仰付 正三位文學博士男爵 加藤 弘之

東京帝國大學文科大學教授文學博士 井上哲次郎

東京高等師範學校長 嘉納治五郎

文部省普通學務局長 澤柳政太郎

東京帝國大學文科大學教授文學博士 上田 萬年

東京帝國大學文科大學教授文學博士 三上 參次

文部書記官 渡部董之介

東京帝國大學文科大學教授文學博士 高橋順次郎

國語調査委員會委員被仰付

正四位文學博士 重野 安釋

正五位 德富猪一郎

從五位文學博士 木村 正辭

從七位文學博士 大槻 文彦

從三位 前島 密

●試驗問題漏洩 仙臺市高等女學校入學試驗問題を師範學校附屬小學校に洩らし講習せしめたる

こと、發覺し教育者間の大問題となり、各學校長は協議の上談判委員を選挙したりとの報あり面白からぬことなり。

●ヒューズ嬢の談話 と題して、萬朝報に載せたるもの、面白み節あれば轉載しつ。

△勉學 は直接教師に就するは一日僅に二時間、他は隨意に大學の、又は分科の、圖書館に入りてすれど、午前のうち三時半ほどは熱心に各自の室に於てす△食事 朝起るは七時にて、食事は朝が七時、晝が一時頃なり、英國人は通例朝食に肉を交へざれど麩、バター、シヤムの外に少許の肉あり、晝は其外に多量の牛乳を加ふ、三時半より四時頃を「茶うけ」の時とし、各

自隨意に食堂に下り珈琲、麩などを取る△茶話會 總て大凡の有様が談笑の間に知識を得る仕組にして、己が室に茶菓を供へ教師や仲よき生徒を招くと多し、教師も折には同ト方法にて生徒を招き、此時を以て男女兩生徒を接近せしめ自ら其中に立て大に彼等の知識を發展せしむ△運動 午後には戶外の運動もあり、テニス、ホケー、クリケットなど盛なり△訪問 校外の朋友又は大家を尋ねて社交的の知識を養ふも彼等の重なる修業法の一なり、雨天と雖もひん／＼しく出行きてひるむとなし△晚餐と討論會 晚餐は彼等の最も樂しとする食事なり、素輕き衣服に更めて娛樂しつゝ二三時間を費やして食を終り、全校又は組々に討論の會を開く、其盛なるは全く議會の体裁にして甲論乙駁面白くして且有益なり△就眠 の前一時間は又勉學し、終れば又々茶菓を以て親友と會し、快く談笑なごして後に寢に就く△一年中に勉學する時 は廿四週より三十週にして他は悉く社交上の知識を發育するに勉む△夏期休暇 の時などは特に隊を作りて僻地に行き 保養の中に社會と天然とを學ぶなり△學費 寄宿の料は一年六七百圓にて足る學校もあり高きは千二百圓程にも達す。

●加納子爵の美舉 全子爵には先月十日、二葉幼稚園の貧兒四十三名に、一日の快樂を與へんと

て、大森に於ける子爵邸に招き、主人を始め夫人

子息令嬢等に至るまで、皆此幼兒の中に打ち交りて種々の響應遊戲等をなして、彼等を樂しませしめたりといふ、近來の美舉といふべし。

●南蔡文庫 麻布飯倉町なる徳川侯爵邸にて、祖先頼宣公よりして代々傳はりたる珍書寶物等數しれぬ許なるを、只だ秘藏し置かんよりは廣く視覽せしめて、世を益するに如かずとの趣旨より、同邸内に文庫を設立し、先月十三日そが開庫式を舉行せられ、紀州出身の紳士數百名を招きて響應せられたりといふ、我國華族たちの皆此美舉に倣はれんには此上なき公益となるべし。

●好學園女子寄宿舎の設立 帝國教育會の千田時次郎氏は、近時都下の女學生中親戚知己の家に寓し又ば自炊をなす等と稱して自儘の生活をなし甚しきは下宿又はあやしげなる素人下宿に起臥し

往々誘惑に陥るものあるを憂ひ、麴町區三番町六十八番地に好學園と稱する家族的な女子寄宿舎を設け寄宿生をして都下の諸學校に通學せしむる傍園内にありて家政的の訓練を與へ、且つ夜間には「教育」、「兒童心理」、「實踐倫理」、「家事衛生」等に關する講話をなすとの事なり。詳細は、時を得て參觀の後報導する事とすべし。

●家事講習會 神田小川町一、女子文學會内に新設の同料は入會者既に定員に達せしも大教場を得たれば此際尙若干名の入會を許すといふ、講師は女子高等師範教授松本文學士「兒童教育」同教授佐田鎮子（衣食住、家事教授法）同教授谷田部順子（裁縫教授法）同教授岩川理學士其他學士數名なるよし。

●女子文學會

神田區小川町一番地に新設の同

會は一般、女子教育の隆盛につれて入會者頗る多しといふ、會長は木村博士、顧問は井上、小杉兩博士にして講師には井上頼國(枕草子)尾上文學士(三鏡)大川茂雄(文學史、制度)吉丸文學士(十訓抄、女子風俗史)藤井靜子(作文)小杉博士(有職、源語)佐々木信綱(古今集)南茂樹(文學士)新村文學士(言語學)木村博士(万葉)畔柳文學士(文學研究法)等の諸氏なるよし

●筆の雪

●女子國語讀本 落合直文氏著述の女子國語讀本に怪しからぬ記事載せありとて、例の萬朝報攻撃の鋒を磨けり、若し事實ならば随分面白からぬこと、云ふべし。

●去々月卅日 福井市火を失し三千戸を焼さ拂ふの慘事あり、先月十日頃、東都は櫻花既に散り

て名残も留めざる頃俄然として寒氣大に至り、國內所々に降雪の甚しきを見たり、今同月十一日東京に達したる電報により、各地の寒氣及被害の一斑を擧げんか

●降霜被害 十一日静岡特發昨夜寒氣強く攝氏寒度計零度三に降り霜の爲め桑、茶も大損害を受け就中一番茶は半作の見込となり茶葉家恐慌を來せり

●京都の大雪 十一日京都特發昨朝來 俄に氣候變り寒氣非常なりしが昨日午後二時廿八分より細雨に霰を混して降り始め四時七分より降雪となり同五十分頻りに降り其後斷續九時三十分大雪となり本日午前零時四十分歇む(今又霽降り來る二時半)花笑ひ鳥囀づる時稀有の出來事にて明治廿五年四月十日午前六時十分より同八時三十分まで雪ふりたることありしも地上に積りしことは未嘗有なりと古老も言へり

●神戸に霰降る 十一日神戸特發 昨日來春寒強く本日午後四時霰降り天候陰險なり

●青森の大雪 十一日青森特發 今日に至るも降雪歇まず

●山形の吹雪 十一日山形特發 昨夜吹雪降雪未だ歇まず今日山形警察署開警式を行ふ筈なりしも爲めに延期せり

●上州の降霜 十一日前橋特發 今朝降霜あり寒氣強し

●山梨縣の霜害 の如きは實況視察の爲め巡回

したる吉池農商務技師の談に依れば同縣下の霜害は實に豫想よりも甚敷就中東山梨、東八代兩郡の如きは最も慘狀を極め中には一望青緑を見る能はざる處もあり其損害總高は約二十八萬七千圓に達し數十年來未曾有の慘事なりと。嗚呼何ぞ本年に入りて天災の然かく、頻繁なる。

●露國の幼兒死亡率大なり 露國某地方廳の調査に徴するに、多くの州にては一年兒の死亡率は四五割を占め、處に據ては遠く之よりも登るものあり、醫師の報告に據れば此の原因は主として農民の無智なると、母親の田野に耕すが爲に幼兒の養育を怠るとに基き、尙子供附の乳母を雇うて子を養ふも其の一原因をなし、乳母の子は自然の結果として人工法を以て之れを養ふことゝなるが故に死にするもの、隨て多しとなり、但し此の點に

於ては、回教徒の露人中には、子は實の親必ず之を育乳せざるべからざる法律あるが故に、幼兒の死亡も割合に少く例へば某州に見るに回教徒の幼兒死亡率は一割四分餘に當るも基督教徒のは三割四分餘を占めたり。(婦人衛生雜誌)

●佛國人口益と減す 佛國商務大臣の報告に依れば、佛國一昨年度に於ける人口は總計三千八百五十一萬七千九百七十五人にして、又同年度内の出産者は八十二萬七千二百九十七人、死亡者は八十五萬三千二百八十五人、結婚は二十九萬九千八十四件、離婚は七百五十七件なり、而して死亡數の出産數に超ゆること二萬六千人、人口益々減少の傾向あり、當分の處増加の見込は到底なしとのことなるより、本年度代議院にては特別委員會を設けて其原因を調査せしむることゝし、右委員會

は一月廿日第一回を開きたるが、其の時内閣議長  
 ワルデック、ルソー氏は演説して、右調査の結果  
 は追て法律として發布したき旨を説きたりとい  
 ふ。

地方通信

●高知より (四月十九日) 1 y 生

◎都人はまだ櫻狩にいそがはしき折柄と存じ候へ  
 ども、當地は桃散り櫻散りて、もはや花のおもか  
 げ無之、目に見るものは只青葉はかりにて、未だ  
 ほととぎすの聲こそ聞こえね、潑潑たる初鯉は己  
 に市に上り申し候。

◎されば各學校も學年試験を終り、何れも皆新學  
 年の授業に取りかゝり候、其中、

◎高等女學校は去る廿九日卒業證書授與式を舉行

致し候が本科卒業生六十九名有之候。

◎今是等卒業生の今後の方向をもれ聞き候に、  
 校内の補習科に入學するもの三十八名、裁縫を專  
 修せむとするもの二十二名、家事に従事するもの

九名、女子高等師範に入學せしもの、女子大學に

入學せしもの、縣外に遊學せしもの、病氣のため

暫時保養のもの、各一名列有之由に御座候。

◎補習科とは本科の上に設けられ、在學一ヶ年の

後小學教員たる資格を得べきものに候。

◎今回この科を卒業せしもの二十七名、其内一人

の女子高等師範に入學せしものを除けば、他は何

れも小學教員たらんとするもの、及び己に教員た

りしものに御座候。

◎新入學志願者は年々増加いたし候が、本年は七

十名の募集に對し三百九名有之候、されば撰拔試



験により餘の二百二十餘名を拒絶するの止むを得ざる事と相成り候由。學校設備の十分なる爲とはいへ、かく多數の生徒を收容し得ざるは、女子教育の爲め誠に遺憾千萬の次第に存じ候

◎然るに、もと縣師範學校教諭たりし横田久壽吉氏今春一月より成女學舎と云ふを設け、其欠を補ひ居られしが、先月來縣視學池田永馬、縣屬北村浩諸氏又もや私立高知女學校といふを設けられ、己に四五日前開校の運びに相成り候處、今回兩校合同の議熟し昨日合同式を行ひ本日より授業を始め居り候。

◎校長は前縣立高等女學校長たりし南部義壽氏にして學科は凡て縣立高等女學校と同等の程度として尙將來は大に其規模を擴張する由に御座候。

◎教員は目下の處として舊縣立女子師範卒業生北

村いと子、東京渡邊裁縫學校卒業生前田松壽子、男教員横川某、之に當られ、尙女子高等師範出のひとにして現縣立高等女學校教諭西森元子、海南學校教諭佐竹右虎、其他の諸氏之を助けらるゝ、由に候。

◎生徒は現に百名近く有之候が、尙増加するやらの見込に候由、此校にして都合よく行かば、縣下女子教育のため誠に喜ばしき事かと存じ候。

◎當地氣候不順 去る十日前後の寒氣は意外に嚴しく、しぐれ時々降り來り、東北方には時ならぬ白雪をさへ見申候、故老の談によれば十數年來稀に見る處の寒氣なりと申され候、 以上

●廣島縣通信

(四月五日 通信生)

近來女子教育、非常に隆盛に赴き其教育機關とし

て小學校の膨脹するは言を俟たず、小學以上のものとしては師範學校女子部あり、高等女學校縣立のもの一校あり、共に廣島にあり、私立廣島高等女學校あり又めそむすと派の設立にかゝる廣島英和女學校あり(附屬幼稚園を設く)、又比婆郡吉舎に於ける私立高等女學校あり、世羅郡私立教育會の設立する世羅高等女學校あり、採安郡福山に私立女德學舎あり、これ亦高等女學部なるものを設く、幼稚園は英和女學校附屬の外、第五師團軍人の子弟を教育する濟美學校に附屬幼稚園あり、福山女子尋常小學校に附屬幼稚園あり何れも逐年生徒數を非常に増加しつゝあり。四月五日

### 新刊紹介

▲英文學研究 山縣五十雄譯註

既に發行せられたるもの三卷、曰くサツカレーの白梅嬢、曰くナン、ドイルの荒磯、曰く英米詩歌集、註譯者の英文學に堪能なるは既に定評あり、譯文流暢にして、よく原文の意を寫し出せるさへあるに、雖字難句には一々丁寧なる註譯を附せり。英文學研究者の爲めには、無二の好著といふべし。

定價一冊廿五錢、發行所 東京神田區南甲賀町八番地 内外出版協會

▲愛國婦人 月二回

奥村五百子氏首唱の愛國婦人會の機關として出でたるもの、吾人は其健全なる發達を祈る(定價一枚三錢五厘、麹町區下二番町三七六日本女學會内愛國婦人發行所)

紙面の都合により寄贈雜誌の掲載を略せり。

會報

第七總會

明治三十五年四月二十日午後一時より女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會せり第一鈴にて一同着席先づ中村主幹開會の辭をべられ續て會務の報告あり次に幹事半數改選の投票をなし本田増次郎君の動物哀憐と幼児教育につき演説あり(訖林欄に掲載)て暫時休憩せり此間参考品並に成績品縦覽第二鈴にて一同着席岡山秀吉氏の小學校手工科と幼稚園恩物との連絡につき實驗談あり余興として蓄音機數曲をなし隨意談話に移れり(此間茶菓)終に保姆合唱唱歌をなし午後五時三十分閉會せり

○本日の來會者は石井泰二郎君野本彌生八君毎日新聞記者教育時論記者實驗界記者女子高等師範學校生徒八名會員八十四名其他同伴者數拾名なりき

○幹事半數改選に付野口ゆか、羽田晴、小關せい、雨森劍の四氏退職し投票の結果野口ゆか、小關せい、和田くら、大島小春、雨森劍の五氏當選す

一 集會度數

總會一度 常會四度 幹事會三度

幼兒發育研究組合會七度

會務報告 第六年

自明治三十四年四月至全三十五年三月

一 客員會員數

客員總數二十二名  
 在東京十八名  
 地方三名  
 海外一名

八十四

會員總數四百六十六名

男六十三名 在東京四十六名  
 女四百三名 地方二十七名  
 地方百七十八名

一 雜誌發行のこと

一 幼兒發育研究組合は現在會員二十三名從來の如く毎月一回開會松本孝次郎氏及長瀬復三郎氏の講話ありたり其講話題目左の如し

兒童心理

兒童研究法を參考として五官及諸感覺の教育上に於ける注意及兒童特質に關する研究

育兒衛生

兒童心理

小兒の生理一般傳染病及救急處置

入會

東京の部

芝區新櫻田町一九星野方

小石川區大塚辻町一八東京市養育院内

同

牛込區辨天町四

牛込區袋町二二

本郷區元町二ノ三九

本郷區春木町二ノ二一

麻布區麻布永坂町一

須藤 つれ

安達 かづ

近藤 つるよ

近木 さし

山中 下枝

服部 作枝

土井 たま

大竹 みさ

本所區龜澤町一ノ一〇岩崎方

深川區東元町一

下谷區上根岸町八二

本所區相生町五ノ二〇

女子高等師範學校

同

京橋區築地上柳原町三

四谷區大番町八〇西浦榮藏内

日本橋區驛町八

地方の部

鳥取縣八頭郡智頭村石谷傳四郎内

香川縣中多度郡普通寺町字下吉田

新潟縣中頸城郡大養村大字中柳町

東京府下北豊島郡南千住町六八伊東定吉方

上野國前橋市清心幼稚園

廣島市下流川町一四

香川縣三豊郡觀音寺町觀音寺女兒尋常高等小學校

同

至尾こま

前野さき

大久保雪枝

柳井つる

旗山榮治

小川ゆき

鈴木てる

西浦りつ

小林千年

石谷いし

勝田暢子

上野益三郎

伊東盛枝

杉浦ささ

廣重一枝

吉良むま

豊田せい

改姓

新橋

清水

辻さく

下田たづ

轉居

三寶縣四日市幼稚園

中澤ささ

越前國而谷鐵山三葉社宅

小石川區大塚窪町五

東京府第一高等女學校

深川區明治小學校

四谷區本村町三

香川縣三豊郡觀音寺町觀音寺女兒尋常高等小學校

福岡縣久留米高等女學校

會費領收

自三十五年三月廿六日  
至三十五年四月廿五日

一金壹圓 自三十五年六月

一金壹圓 自三十五年三月

一金壹圓 自三十五年二月

一金貳圓 自三十五年十一月

一金壹圓二拾錢 自三十五年八月

一金壹圓 自三十五年九月

一金壹圓 自三十五年十月

一金壹圓二拾錢 自三十五年十一月

一金拾錢 自三十五年三月

一金參拾錢 自三十五年三月

一金拾錢 自三十五年三月

一金二拾錢 自三十五年三月

一金拾錢 自三十五年三月

重松綾子

吉田かき

辻さき

樋口みわ

下田たづ

大西永太郎

福地くま

保阪ふさ

神田十ゆん

櫻川市子

林てふ

吉田まさ

岩崎たづ

渡邊すみ

小々高みさな

廣瀬たみ

下瀬たつの

榎尾かゐる

藤岡さき



一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金九拾錢	一金六拾錢	一金壹圓	一金五拾錢	一金五拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓五拾錢	一金六拾錢	一金五拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
三月	四月	九月	九月	四月	二月	九月	四月	八月	八月	三月	四月	四月	六月	七月	一月	三月	九月	九月	八月

志賀かま 友達かつ 實しげ 早川いし 近藤つるよ 相賀よし 大久保ゆきね 松田とし 前野さき 玉尾こま 山中かさ 中野ふれ 福田ふく 山田きみ 吉田しう 安藤たみ 岩村あつ 服部たき 福尾きく

一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金參拾錢	一金參拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金五拾錢	一金壹圓拾錢	一金五拾錢	一金貳圓	一金壹圓二拾錢	一金三拾錢	一金壹圓	一金六拾錢	一金二拾錢	一金二拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢	一金六拾錢
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
十一月	七月	八月	四月	八月	六月	四月	三月	四月	十二月	八月	四月	三月	四月	六月	七月	九月	四月	五月	九月

丸山かく 桶田むつ 小曾根よし 成瀬きよ 近藤はま 牧野がれ 淺岡はま 矢澤わさ 齊藤みれ 吉川さい 三宅はな 河合ちよ 清水あい 佐方鎮 西村さた 服部さく枝 土井玉子 山口きよ 吉澤さも

婦人子ども第二卷第五號

一金六拾錢	一金參拾錢	一金壹圓二拾錢	一金貳拾錢	一金四拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓七拾錢	一金壹圓	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金壹圓	一金七拾錢	一金七拾錢	一金七拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
五月	十一月	三月	五月	八月	四月	三月	十一月	七月	四月	九月	一月	五月	七月	四月	三月	十一月	五月	五月	五月

後藤いこ	小向きみ	和田くら	青木せい	中桐確太郎	山下つや	山崎彦八	關谷いまま	伊藤いつき	櫻井光華	相川のぶ	工藤ふゆ	佐藤たか	佐和山	佐々木くさ	福井あや子	重松あや子	深江さき	小野てる	千田季壽
------	------	------	------	-------	------	------	-------	-------	------	------	------	------	-----	-------	-------	-------	------	------	------

一金五拾錢	一金五拾錢	一金七拾錢	一金拾	一金二拾	一金壹圓	一金二圓	一金六拾錢	一金五拾錢	一金五拾錢	一金四拾錢	一金壹圓二拾錢	一金壹圓	一金壹圓	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾	一金拾
自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年	自三十五年
四月	八月	四月	四月	五月	十二月	十二月	四月	十月	八月	二月	十二月	十二月	十一月	十二月	四月	四月	四月	四月	四月

吉住きく	妹尾明	池邊千東	柳井つる	大竹みさを	大村よね	石川よね	瀧澤よう	杉浦ささ	富岡むめ	矢野ふさ	小西信八	依岡あ	進藤つる	宮崎も	小林ふ	高木な	山田せん	富田八千代	渡邊すみ
------	-----	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-----	------	-----	-----	-----	------	-------	------

此廣告依御注文の方婦人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

毎月一回  
五日發行  
二號既刊

# 女界

定價一部  
郵稅共金  
十二一錢

## ● 最進歩せる好女學雜誌 ●

「婦人と小供」は曰く美麗なる婦人雜誌と「人民」は曰く女學雜誌の王にして婦人界の燈明台たるべきかと「教育公報」は曰く内容に外形に最も進歩せるを見る。「小柴舟」は曰く一頃は知らず此の二三年來婦人雜誌の慣として何處までも保守的に(中略)強ひて大聲を抑制し得るのが本領の如く心得てゐる本誌は(中略)在來の流弊を一掃しやうとの意氣込見え(中略)初刊としては充分整つたものである云々と然り世評の如く我「女界」は外形に内容に最も進歩せる女學雜誌にして常に専門大家の筆より成るその第二號要目を見よ▲論說坪井博士▲家庭、磯部武者五郎赤堀峰翁龜井萬幾子嘉悦孝子有住常子井上善兵衛岡野をりえ矢橋小葩野口雨情▲學藝吉丸文學士相馬文學士宇野文學士古川醫學士阿部醫學士等▲をさな兒矢橋小葩▲文苑三木天遊毛呂清春清水橋村野口雨情佐藤紅綠星野麥人佐々木信綱等▲叢談戸川殘花吉丸文學士松田竹嶼等▲小説荒木北影握寒城▲其他婦人文學海外雜俎等▲附録として女子美術展覽會評(記者清水橋村矢橋小葩あり)

### ▲口繪挿畫

女子美術學校教授磯野吉雄▼

主幹原一定記者矢橋小葩野口雨情清水橋村

白鳳社

東京神田區駿河臺  
西紅梅町六番地

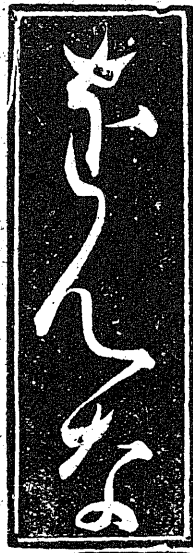
發行所



此廣告依御文注の御方婦人の子供を見たる旨御附記を乞ふ

總裁小松大宮妃殿下 副總裁鍋島侯爵令夫人

大日本女學會發行 東京麹町區 下二番町三六



第二卷

第四號

毎月一回十五日發行定價金拾五錢全國無遞送料

《卷首》愛國婦人會主唱者與村五百子刀自肖像《論說》アラジルの現状、アラジル特命全權公使リマ●日本に於ける婦人教育、ドクトル、ベルツ●近世の英國婦人、ヒュース女史《學藝》和書解題、喜田文學士●漢書解題、丸井文學士●理化問答、朝夷六郎●子供の言葉、梅澤和軒●作文批評、今泉定介●作歌批評、大口鯛二《修身》處女のふるべ、處女のしるべ、尾上文學士《齊家》家庭の音樂遊戲、露草學人●割烹、石井泰次郎●點茶、松浦伯爵《世務》法制談、岡戸文學士●經濟談、伊藤秋南●妻の權利及義務、立澤久雄●各地産業の實況、大島紬、養老酒、菊水酒、養老酒《史傳》ウキクトリア朝の二大作家、孤島生譚草●松の操、稚松園《詞藻》みやび會員歌文《雜錄》歐米週遊雜記、鳩山春子●新選女百人一首略解●圖案、武村千佐子《彙報》内外要報

大賣捌

東京神田區 表神保町三

東京堂

正四位勳三等醫學博士 三宅秀先生著  
大日本女學會發行 日本女子大學校教科書

家事衛生

總クローネ綴ぢ金文字入り菊判二百四十頁定價金六十錢郵税金六錢

此書は文部省學校衛生顧問內務省中央衛生會委員元醫科大學部長なる三宅博士が文部省の囑托により講義されたるものなり書中に衣服食物住居育児看病の五篇ありて我國一般の民度に應じ何れの家にも實行に差支なき様懇切に説示されたり世に類なき家庭主宰者の寶典なり

田邊和氣子刀自遺稿

此書は故田邊女史の令名を不朽に傳へんとて大日本女學會より紀念の爲に發行せられたるなり書中に割烹點茶活花の三篇あり是等の科目を説きたるは此書に多けれども之を讀みて實際に講習し得らるものなりとの世評あり是れ畢竟女史か京都高等女學校華族女學校東京女學館大日本女學會等に於て多年授業法に熟練せられたりし結果なりといふ

●總クローネ綴ぢ金文字入り菊判五百四十頁定價金一圓郵稅拾貳錢

大賣捌所

東京神田區 一橋通町七

有斐閣

(後付二)

久津見藤村先生著

家庭教育  
子女の志す所

洋綴頗美本 ● 定價二十五錢 ● 郵稅四錢

世の父母兄弟姉が大事中の大事、人子女教育の事を附するを遺憾とせられ著者が多年の實驗に依り、最も平易に通俗に家庭教育の仕方を示せられたる者なれば、新日本の父母兄弟姉は勿論學校と家庭の連絡に意を注ぐ教育家は

宮中御歌所寄人中村秋香著

女子草下の錦

印刷鮮明  
紙數三百余  
和裝頗美本  
全一册

● 定價三十五錢 ● 郵稅六錢

男女學生の模範となるべき美文、記事、記行、論說、消息、物語等無慮數百編を撰出せられ特に上段には、要語數千を載せ、作習の模範と應用に供せられしは、他に其比を見ざる國文學の參考書なり

東京市日本橋區箔屋町十六番地

發行所 前川文榮閣

女子高等師範學校講師岡田起作先生編并書

女子習字帖

全四册

一卷金十錢 二卷金十一錢 郵稅各金二錢  
三卷金十二錢 四卷金十五錢

烏丸帖

全二册

上卷金十八錢 下卷金二十錢 郵稅各金四錢

女子書翰文

全二册

上卷 正價金二十五錢 郵稅各金四錢  
下卷 正價金二十八錢

古今和歌集序

全一册

定價金二十五錢 郵稅金二錢

東京市日本橋區  
本石町三丁目 金昌堂

# 女子教育

見！見！見！

編輯は、小森松風、鈴木秋子の二氏、その衝路に當りて、専ら新世紀の精なる趣味の鼓吹すると共に、一面厭ふべき時代の風潮を排して、超然、女學界を闊歩す。

## ●婦人雜誌界の羈王●女子教育界の羅針盤●

三月十八日發行 第一百拾一號 表紙は青年畫家一條成美君の考案になりて、優美なる少女が新粧靄然として、詩情愛すべく、謳うべきものとなりぬ。

**口繪** 東京慈惠病院の眞景 ● 誌友の肖像 ● 伊太利中世に於けるゴシック風の建築物 ● 色古丹土人の酋長ヤコブ

**女子の友** 女子教育に對する世上の惑ひに就て、女子高等師範學校教授篠田利英 ● 婦人の生産力、山脇月江

**家庭** 割烹の理(承) ● 女子高等師範學校教諭藤堂梅軒 ● 裁縫(承前) ● 女子高等師範學校講

**史傳** 丸山宇米子君(承前) ● 遊戯數學、和田信二郎 ● 佛蘭西革命の代婦人(其五) ● 勁林園主人 ● 佛蘭西革

**藝** 命の代婦人(其五) ● 勁林園主人 ● 佛蘭西革命の代婦人(其五) ● 勁林園主人 ● 佛蘭西革

**小説** 水仙 ● とみ子 ● 懸賞當選ゆく水(つゞき)

毎月二回三日十八日發行 ● 定價一冊金拾錢六冊金五拾七錢 ● 毎年二回臨時增刊各一冊金貳拾錢

## ●漫録●

西班牙御伽無名三太郎、任文科大學松籟生 ● 浮世觀、稻葉向東 ● 記憶術、下田春興 ● 花の觀察、在早稻田專門學校、櫻巷子、田

**訪問** 松風 ● 飯塚忠次郎 ● 京都雜觀、林天然、小兒の行爲、綿野り子等 ● 京都烏取子守歌、短川よね子

**寄書** 飯塚忠次郎 ● 京都雜觀、林天然、小兒の行爲、綿野り子等 ● 京都烏取子守歌、短川よね子

**雜報** 學校の榮 ● 婦人會の榮 ● 女子言文一致會

**文苑** ある人の新宴を壽きて、福羽美緒 ● 野外

定處 ● 小出榮 ● 月前陳思、池邊義家 ● 短歌三首、對

上柴舟 ● 海村 ● こゝろにうかぶま、故矢部富子

故郷の夢 ● 櫻村 ● こゝろにうかぶま、故矢部富子

● 兼題歌文、選者落合直文、文學士尾上柴舟兩先生

(後付四)

發行所 東京電話 本局二七二 鎌倉一 東洋社

此廣告依御注文の方婦人子供を見たる旨御附記を乞ふ

# 新刊報告

福岡縣視學官長倉雄平先生序  
三重縣師範學校教諭水谷兵四郎先生閱  
入澤博 笠原政徳 兩君共著

## 國民教科資料

全一冊 四六判形 美本  
定價金三十五錢

郵稅 金六錢

常識に富む國民は事業をなす國民にして事業をなす國民は富強の國家をなす然るに我  
國今日の國民の多くが常識に缺けるは掩ふべからざる事實なり著者之を憂ひて救治  
せんと志し此書即ち成るされば歴史地理法律政治實業處世等苟も日常必須の知識は悉  
く本書の内容にして一々網羅して餘さざる也故に此書を携ふるものは箇人としては幸  
福を得べく國民として善良なる民たるを得べく將た教育者は國民教科の資料を勞せ  
ずして得べく學生は之に依りて適從する所を得べし眞平國民の常識の好資とは本書の  
謂乎

## 算術問題解法教科録

全一冊 上卷定價四十錢

佐久間文太郎先生校閱 田中延先生著

上卷 既製

著者多年中學教育に従事し常に學生の算術を練習するの良參考書なきを慨し此缺陷を  
補はんが爲めに本書を著せしものにして其解くところは整數分數より起り諸等數比  
例百分算級數開平立に至り極めて秩序的に各種の問題を説明し次に例題に依りて  
く必要なる事項を述べ次に例題を與へ其解き方を叮嚀に説明し次に例題に依りて  
解き得べき若干の練習を置き全部此の如くして成る其例題の數は殆んど二千題に  
種々の受驗者及小學校員講習用として無比の良書なり

## 發行所

東京市日本橋區本石町三丁目二十二番地

# 金昌堂

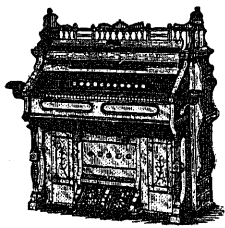
リセ領受ヲ牌賞等壹第 於ニ會覽博國內回五第ハ琴風製葉山



山葉製風琴

(附 險 保)

壹號 形金拾六圓五拾錢  
 貳號 形金拾六圓五拾錢  
 參號 形金拾六圓五拾錢  
 四號 形金拾六圓五拾錢  
 五號 形金拾六圓五拾錢  
 六號 形金拾六圓五拾錢  
 七號 形金拾六圓五拾錢  
 八號 形金拾六圓五拾錢  
 九號 形金拾六圓五拾錢  
 十號 形金拾六圓五拾錢  
 第十一號 形金拾六圓五拾錢  
 第十二號 形金拾六圓五拾錢  
 第十三號 形金拾六圓五拾錢  
 第十四號 形金拾六圓五拾錢  
 第十五號 形金拾六圓五拾錢  
 第十六號 形金拾六圓五拾錢  
 第十七號 形金拾六圓五拾錢  
 第十八號 形金拾六圓五拾錢  
 第十九號 形金拾六圓五拾錢  
 第二十號 形金拾六圓五拾錢



○山葉製洋琴 金參百圓以上  
 ●舶來風琴 三百圓以上三千圓迄各種  
 ●舶來製ヴァイオリン 百圓以上千五百圓迄各種  
 ●金五圓以上各種  
 ●他弓箱附屬品  
 ●等各種  
 ●舶來各種  
 ●樂隊用陸軍吹奏樂器各種  
 ●戰捷紀念國旗印銀笛數種  
 ●右人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓  
 ●右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジ  
 ●ヨレント各樂器附屬品、和洋音樂書  
 ●各種郵券貳錢御送附わらば美麗なる目  
 ●錄進呈す



新刊音樂書

林廣守作曲、ノエルペリー先生和聲  
 一 君が代  
 高須治輔先生作歌、本元子作曲  
 一 滿洲地唱歌  
 北村季晴先生作 (第參版發行)  
 一 北村季晴先生作 磨の曲  
 一 第一集 磨の曲  
 一 第二集 磨の曲  
 一 第三集 磨の曲  
 一 全三篇 露の夢  
 ノエル、ペリー先生編  
 一 オルガン、ピアノ練習書 大形洋裝

美本 定價金拾錢 不要郵稅  
 頗美本 定價金拾錢 郵稅金二錢  
 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢  
 頗美本 定價金貳拾五錢 郵稅金四錢  
 定價金五拾錢 郵稅金八錢

ピノアノオノガルン  
 調律修繕

明治三十四年二月廿八日第三種郵便物許可